

明治四十二年十一月十二日第三種郵便物認可 明治四十二年四月一日發行（毎月一回一日發行）



求道

第六卷

第四號



求道第六卷第四號目次

求道

◎如來の御心

自督

◎煩惱惡業と御方便

講話

◎本願の眞意

聖傳

◎チャータカ釋尊傳

第二十 良馬の話

第二十一 良き戰馬の話

第二十二 淺瀬に於ける馬

告白

◎家庭問題より信仰に入る

講義

◎一人のためなりけり

講義

◎歎異鈔

近角常觀 辻寛子 都築百太郎 園千鶴子 近角常觀

第十二章

嘆咏

◎うれしき舟路（長詩）

増田八風

◎たから（同）

同

◎天に（同）

三井甲之

◎適應（同）

同

時報

◎尾參傳道

毎日曜午前九時

求道學舎

《本郷森川町一帯地》

毎土曜午後二時

第二求道會

《九段坂佛教俱樂部》

毎月二日午後七時

第三求道會

《日本橋蠣殻町説教所》

求道

第六卷 第四號

如來の御心

我等罪惡の深きを自覺せざるも如來の御心を知らざるが故也。我等歡喜感謝の念乏しきも如來の御心を知らざるが故也。人皆以爲らく、如來の御心は惡しきものでも助けたまはんとおの思召なりと、既に惡しきものでもといふ、如來は惡しきものでもたすけたまふ、しかれども善きに過ぎたることはなしと、此に於てや知らず識らず、自ら善人となりすまして我等が罪惡を自覺せざる也。而して我等は遂に善人たるあたはず、終に罪惡の避くべからざるに至るや、亦以爲らく、惡しきものでもたすけたまふと、恰も惡を寛容されたるが如く感じ去る、曰く此の如きものでもたすけたまふと、知らず識らずの間、如來の御心は我等を目的としたまふことを忘れて、自ら招伴の席末にあるが如くす。かくの如く本願の正意我等が爲めなる大慈大悲を疎かにして、不精無精に如來の救済を仰ぐ、是歡喜感謝の念乏しき所以也。

如來の御心は惡しきものでも助けんとはあらず、惡しきものをたすけんとおの御心也、惡しきものをこそたすけたまはんとおの誓也、如來ありて後たすけんとおの願あるにあらず、特に惡しきものをたすけたまはん爲にあらはれたまふ如來也、若し惡しきものを助くることを得ずんば佛とはなるまじとの誓こそ、抑々如來のあらはれたまふ源なり。實に我等罪惡深重のもの、たすかるべき善なけれども、唯彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生を遂ぐるなり、かく信ぜしめたまふも誓願の不思議也、念佛申さんと思ひたつ心の起るも誓願の不思議也、人生若し如來の誓願不思議ましますば、五濁惡世の我等いかでか、如來の御名を聞き、御名を信じ、御名を稱ふることを得べき。

かく如來の御名を信じ稱へんとする一念、はや如來の御心は我等が内心に徹したまひて『そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさ』と、罪惡の自覺と共に歡喜感謝の情油然而して心に溢れ来る。『そくばくの業をもちける身にてありけるを』嗚呼我等は如何に業深き身よ、罪深き心よ、久遠劫より、いままで流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、いまだ生れざる安

養の淨土はこひしからず候こそ、まことによく煩悩の強盛に候にこそ。實に我等は底しれぬ罪を持ちける凡愚也、しかもかくの如き業をもちける身にありけるをたすけんと思ほしめしたちける本願のかたじけなき、業をもちける身でも助けんといふにあらず、かくの如き業をもちける身にありけるを助けんためにあらはれたまふ如來とは、いかに如來の御心の辱じけなき。願を起したまふ本意、惡人成佛のためなり」とさし、かど、今こそ其惡人とは我身也としられたり、此我身一人のためにたてたまひし本願也、あらはれたまひし如來也、名のりたまひし名號也と知られたり、是れ即ち念佛申さんとおもひたつ心の起る時也、是攝取不捨の利益にあづけたまふ也。十方微塵世界の、念佛の衆生をみなほし、攝取してすてざれば、阿彌陀となつてまつる。如來の御心の知れたる一念即罪惡を自覺せしめたまふ也、其罪惡のものを助けんとの御心こそ抑々如來のあらはれたまふ御本意、現に我等に向ひたまふ御姿にてましくけり。

此の如く、如來の御心をいたゞきたてまつれば我等は其御心に從ひたてまつりて御名を稱ふる外に爲んすべし、本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまざるべき善な

きが故に、惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐる程の惡なきが故に。唯何事のはからひもなく念佛して、此の如き廣大深重の御心を仰ぎたてまつるべき也、抑々本願を立てたまふ本意、世の戒律を保ち得ざるものために、世の禪定を修し得ざるものために、無常の風激しき世の中に、煩悩の泥中に陥れる我等の爲に持ち易き、稱へ易き念佛を興へたまふ御心こそ、選擇本願の正意、佛かねてしろしめして我等がために、五劫の思惟、永劫の苦勞を爲したまふにてありけり。されば五劫の思惟も畢竟罪深き我等を助けんとの御心也、永劫の修行も罪深き我等をみなほして助けたまはんと、の御心也、我等貪欲、瞋恚、愚痴に苦しめるを憐みたまひて、欲覺、瞋覺、害覺を生じたまはず、欲想、瞋想、害想を起したまはず、虛偽諂曲の我等に向て清淨眞實の御心を廻らし、和顏愛語を以て、意を先に承問したまふ、かくの如く永劫の如來の御心の凝りかたまりて遂に正覺を成じたまひし御姿こそ即ち南無阿彌陀佛にてまします、是誠に、佛願の生起本末也、本願召喚の御聲也、無碍光如來の光明也、大慈大悲の御親の心也。

『無碍光佛のひかりには、清淨歡喜智慧光、その徳不可思議にして、十方諸有を利益せり』如來無貪の御心より生じて我等

が貪欲を對治したまふ御姿は清淨光なり、如來無瞋の御心より生じて我等が瞋恚を亡したまふ御姿は歡喜光なり、如來無痴の御心より生じて愚痴を照したまふ御姿は智慧光なり、諸佛三業莊嚴して、畢竟平等なることは、衆生虛誑の身口意を、治せんがためとのべたまふ、畢竟如來八萬四千の光明は我等が八萬四千の煩惱を消滅せんが爲にあらはれたまふ御姿なりけり、聖人曰く『夫れ眞佛土を顯はさば佛は則是れ不可思議光如來、土は又無量光明土なり』と、即ち我等が惡業煩惱の身を照さんとてあらはれたまひし御身こそ即ち盡十方無碍光佛にて在す、さればこそ我等無明の大夜に迷へるもの、一たび此如來の光明に遇ひ、如來の御心に接したてまつるの一念、實に信心歡喜の曉なりけり、和讃に曰く『盡十方の無碍光は、無明のやみをてらしつゝ、一念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらしむ』と。

嗚呼如來の御姿は三毒煩惱を初めとして八萬四千の煩惱の結晶たる我等を照し救はんが爲なりけり、されば又和讃に曰く『無碍光の利益より、威徳廣大の信をえて、かならず煩惱のこぼりとけ、すなはち菩提のみづとなる、罪障功徳の體となる、こぼりとみづのごとくにて、こほりおほきにみづおほ

く、さほりおほきに徳おほし、』と、嗚呼如來無碍光の春風の如き御心に接し奉りなほ、如何なる清淨微妙たる水の如き我等が煩惱の塊も、一々和融溶化し來りて、唯懺悔の涙と共に稱名念佛するあるのみ、是抑々如來無碍の御光は清淨歡喜智慧を初めとして我等が三毒の煩惱をあはれみたまひて特に之を照さんが爲めの威神功徳の御姿なれば也。其御光一たび我等が煩惱の胸中を照したまふ一刹那、いかによく煩悩の強盛に候にこそと、石の如く、鐵の如き氷結せる我等初めて罪惡自覺の念を生じたる是煩惱の氷解くるものにあらざるや、其罪惡自覺の懺悔の涙は即ち如來無碍の御恵を感謝し奉る歡喜の涙なりけり、是即ち菩提のみづとなるものにあらざるや。かくの如く一たび如來の御心我等が煩惱の胸の中に達しなば、知らず識らずの間、功徳大寶海に満足して、口に溢るゝものは唯感謝報恩の念佛なりけり、念佛は義なきを義とし、様なきを様とす、かくの如き如來の御心にはからはれまゐらせて、我等何等のはからひも盡きはて、たゞ何事もなく、如來の御名を稱へたてまつる念佛は、念々皆如來大悲の御心より流れ出てたまふなりけり、は無碍光如來の攝取選擇本願なれば也。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

目 督

煩惱、惡業と御方便

○如來の御慈悲は惡しきものでも助けたまふのではない、惡しきものをこそ助けんとの御心であると氣附かせていたゞいて、何んとなく初つ言の様に繰返し／＼喜ばしていたゞいて居る、此度の、社説も、講話も夫ばかりで、定めて皆さんが、此位のこと初めて氣がついたかと笑はれるであらう。

○いかにも今迄とても言はぬでもなかつたが、今更のやうに嬉しい、歎異鈔を幾十回讀じたか、幾百回繰返したか知らぬが、新しい歎異鈔を讀む氣がする。

○喜ぶべきことを喜ばぬにて往生はいよく／＼一定とおもひたまふべきことなりと明らかに示されてあるにも拘はらず、心中に、それでも喜べるに如くはない、いそぎ淨土にまゐりたくあつたら夫程立派なことはない、煩惱が起つてもよいが矢張りぬほどのよいことはないと思ふて居る。

○じゃから、喜べるものなら喜ぶたい／＼、何んとなくこれで

のである、下の文にまことに／＼煩惱の強盛に候にこそとあるも此我身の淺間敷きことが知られた言じや。

○和讃に煩惱具足と信知して本願力に乗ずればと仰せらるゝのが此處じや、如來様が煩惱具足の凡夫をと仰せらるゝ御言が私の身に泌み渡りたとき、かゝる煩惱具足の私をと頂かれるのである、歎異鈔の前の文にも煩惱具足のわれらはいづの行にても生死をはなるゝことあるべからざることをあはれみたまひて願をおこしたまふ本意惡人成佛のためなればと仰せられてある、惡人とはこの煩惱成就の私のことであると知らして貰ふのである。

○全體煩惱といひ、業といひ、いかにも我身のあさましきことゝ氣がつかねはならぬ、『よきこゝろの起るも善業のもようすゆへなり、惡事のおもはれせらるゝも惡業のはからふゆへなり』と仰せらるゝと、業なればいたしかたなしと、自分の責任を免がれたか、寛容でもされたものゝやうに思ふようになる、これがそも／＼大なる誤である、業は我等の罪である、彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと

も足らぬ／＼と思ふて満足するときにない、満足せぬから感謝の念が起らぬ、それで喜べるならまだしものことであるが結局喜べぬ、そこですてやりにして喜べずとも御助けに間違はないと不精無精におしつけるのであるから、やはり物足らぬ、物足らぬ位ならよいが結局喜べてもよいのじやと邪見に陥るのである。

○喜ぶべきことを喜ばぬにて往生は、いよく／＼一定とおもひたまふべきなり、喜ぶべきこゝろをおさへて喜ばせざるは煩惱の所爲なり、しかるに佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫とおぼせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときわれらがためなりけりとしられて、いよく／＼たのもしくおぼゆるなり、何氣なく讀むと煩惱の所爲なりと云ふを自己以外のものゝ様に思ふて、煩惱といふ奴の所爲じやといふて自分の責任を免れたやうに感ずる弊がある。

○煩惱といへばとて他人のことではない、我等が煩悶懊惱のことではないか、これほど喜ぶべきことを喜ばぬとは、いかにも煩惱の深いことじや、しかるに佛はかねて御存知あつて煩惱具足の凡夫と仰せ下さることなれば、かくの如きのわれらが爲なりけり、この様な煩惱の深い私の爲の御苦勞と頂く

仰せられてある、このそくばくの業をもちける身にありけるをとは、いかにも我身の罪惡のふかきを自覺されたる御言である。

○さればかたじけなくも我御身にひきかけて、我等が身の罪惡のふかきをしらず、如來の御恩のたかきことををしらずして、まよへるをおもひしらせんが爲にて候ひけり、實に我等はよく／＼罪惡のふかきもの、業多きもの、煩惱深き身であることを、知らして貰ふことの出来たは、この煩惱惡業を憐みたまふ大悲の御心によりて自覺せしめたまひたのである。

○我等は業を如何ともすべからざることであるが、其業あるものを憐みたまふ如來の御心はいかにも難有ことである、それにつけてもいかにも業報のふかきことを懺悔する次第である。

○夫につきて思ひ出したは、或人の尋に昔の信者は何事でも前世の業報じや／＼といひ、今の青年は何事も如來の御方便じや／＼といふ、どうしたものかと尋ねられたことがあつた。

○業報まかせなれば何も他力をたのみ甲斐もないことじや、其業報の深いものをたすけんと誓ひたまふ御本願が辱しけな

いのである、また何事も御方便じゃ〜と喜ぶばかりが信仰ではない、御方便は、信心を發起せしめたまふ御方便なれば、眼目たる信心を忘れてはならぬ、しかるに動もすれば自己の爲したる罪惡までも御方便であるといふ様にいふて責任を免れた様な横着な考を持つことになる。

○罪惡は他迄我身の罪である、業報は他迄我前世の宿業のあらはれてある、其罪惡業報に纏はれて居る私を見すたまはぬ大慈大悲の御心は其罪業の身に付きまといて逆惡もらさぬ誓願に方便引入して下さるのである、此逆惡もらさぬ誓願が信せられたが信心である、此逆惡のものをもらしたまはぬ親心が頂けたが信心である。

○いかばかり御手間か〜し菊の花、この罪惡業報のものを、見すたまはぬ御方便の御手引によりて終に此の如き罪業のものをたすけんと、親の御心なりと一念發起信心清淨の花が開て下されたのじゃ。

○略文類の終りに曰く、今宗師の解を披きたるに云く、如意と言ふに二種あり、一には衆生の意の如し、彼の心念に隨て皆應に之を度すべし、二には彌陀の意の如し、五眼圓かに照し、六通自在にして、機の度すべきものを觀をなはして、一

念の中前なく後なく、身心等しく趣き、三輪開悟して各益したまふこと同じからざる也と。

○次に又言く、敬て一切往生の知識等に白く、大に須らく慚愧すべし、釋迦如來は實に是れ慈悲の父母なり、種々の方便をもて我等が無上の信心を發起せしめたまへりと。

○實に彌陀は我等の心念に隨ひ、大悲の思召により我等を益したまふこと不同なり、又釋尊は種々の方便を以て、我等が信心を發起せしめたまふ御慈悲を仰ぎて、大に我身を慚愧せねばならぬ、そこで之を結びて曰く、明らかに知りぬ、二尊の、大悲に緣て一心の佛因を獲たり、當に知るべし、斯人は希有人なり最勝人なりと、嗚呼煩惱惡業の我等が希有人最勝人としていたゞくといふはいかなる仕合せぞや。

○高原の陸地には蓮華を生ぜず、卑濕の淤泥には蓮華を生ず、此は凡夫煩惱泥中に在て、佛の正覺の華を生ずるに喩ふる也、斯る如來の本弘誓不思議力を示すとは實にこの惡業煩惱の我等が胸の中に信心開發の花が咲いた有様じや、妄念の中より稱へ出す念佛は、濁にそまぬ蓮のごとくにて決定往生疑ひなし南無阿彌陀佛。

謹 話

本願の眞意

〔求道學會日曜講話〕

近 角 常 觀

上

今日の題は『本願の眞意』であります。いつも如來本願の廣大なるお謂れを繰返し〜お話する事でありますが、又私自身も之を味はせて貰ふ度毎に、いつも〜新らしく喜ばせて貰ふ事であります。今日お話する所も先達て來お話する所と別に變はりはないのでありますが、又此頃になつて私自身に本願の眞意、本願の正意といふ事を一際有難く頂かせて貰ひましたから、今日は之をお話し致さうと思ふのであります。

本願の眞意とは何うかと言ひますに、之をぐく切りつめて申しますと、他人の事では無い、私共一人々々のやうに、實に惡業の深い煩惱の多い、我身ながらも呆るゝ斗りの者を、大悲の恵みは特に捨て給はず、斯の如き者を殊更に哀れと思召し、昔より今日今時に到る迄常に憐みの心を起し、まこと心を以て私共に向うて、下さる。此の如來の眞の思召しが如來本願の御眞意であります。殊に能く頂かねばならぬのは、此の罪深く惡業重き者を殊に哀れ給ふといふ此の大悲本願の御

眞意を充分に頂かねばならぬのであります。

かねて私は多年の間『歎異鈔』を繰返し〜皆様にもお話致し、又私自身にも喜ばせて貰ひ、學舎の諸君とも毎朝拜讀して居る事がありますが、どうも近頃になつて讀む度に彌々新しき光に氣附かせて貰ひます。初に少々言葉に角が立つが、今日『本願の眞意』と題してお話せんとする極要點を一言際立て、申して置き度い。之は誰でも言ふ事で、既に私の講話にも屢々申した事でありますが、此の『歎異鈔』を平日我々は如何に頂いて居るかといふに、如何なる惡人でも佛は決して見捨てぬとある廣大の思召であると誰も頂いて居る。勿論此の如く頂いても、肝心のお慈悲一つが頂ければ夫て差支は無いのでありますが、情々『歎異鈔』を頂くに、『歎異鈔』のみならず眞宗の説教と云へば常に惡人を助け給ふお慈悲と聽いて居ながら、何うも其處の所が適切に頂けぬ。動もすれば惡しき者を助けて下さる本願故、惡るくてもよい杯といふ邪見に陥つて、眞實大悲のお恵みが頂けぬのは如何なる譯かといふに、如何なる惡人でも助けて下さるといふ言葉夫自身が抑々本願の御眞意に叶うて居らぬのである。彌陀の本願は如何なる惡人でも助けるとの御本願である、如何なる罪人でも助けるとの教へが『歎異鈔』であると言つて仕舞へば、夫て遺憾は無いやうであるが、熟々頂いて見るに何うも夫ては言葉が足らぬ。何の點が足らぬかといふに、如何なる惡人でもといふ『ても』の言葉が甚だ物足らぬといふ事に私は近頃大に氣附かせて貰つたのであります。勿論此の事は前にも度々申して居つたのであります、此頃殊更に氣附かせて貰うて見ると、何うも

此の「でも」がお慈悲を頂くに甚だ邪魔になるやうである。之は今日は大層言葉に角を立てましたが、蓮如上人の『御一代聞書』には「聽かば角を聞け」と仰せられてあつて、角を立てぬとお慈悲が頂き難いから、今日は角を立てゝ言はうと思ふのであります。

て「如何なる惡人でも」といふ言葉は何方へ行つても佛の思召しが引締つて自分々々の上に頂けぬ事になる。先づ善い方——善い方と言つても眞實に善いのでは無くして、此世の倫理的の意味で善い方へ轉んだ場合を言へば何うかといふに、佛は如何なる惡人でも助けるとの仰せだから、惡るくても差支は無いのであるが、出來る限りは善いに如くは無いいといふ考が心中に遺つて居る事になる。惡い者でも助けて下さるが、出來る丈は善いに越した事は無いといふ考があると、あのづと自分の心を攻め立派にならうと勉めるようになる。之は世間の上の道德修養といふ上から言へば實に結構な事で、又正に斯くあらねばならぬ事であるが、併し本願の正意より言ふ時は、自分に善くならねばならぬといふ考が有る丈け、夫れ丈け自力が遺つて居る事になる。之を『歎異鈔』の上で言ふと、

口には願力をたのみたてまつるといひて、こゝろにはさこそ悪人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも、さすがよからんものをこそたすけたまはんずれとおもふほどに、願力をうたがひ、他力をたのみまいらすこゝろかけて、邊地の生をうけんこと、もともなげきおもひたまふべきことなり。云云

る事になる。古來眞宗の信者が、惡るくてもよいのであると。恰も惡を許るされたるように考へたり、又今日の青年が自分で罪惡非行を演じて居ながら、之も如來の御手廻はしてあるなどと言ふ邪見に陷るのは皆な之であります。熟々頂いて見るに、如何なる惡人でも助け下さるといふ言葉は、解つた様でまだ本願の正意、本願の眞意の頂けて居無き言葉である。勿論も慈悲を頂いた上から言ふのなら一向差支は無いのであります。併しながら然う言ふてゐる中にいつの間にやら本願の思召に對して、自分が善い者になつたり、授け遣りに落ちたり、甚だ頂き難いのであります。

茲に一つのお話をする、先日私の信仰上のお友達で常に寄り合つて喜んで居る方が私に話をなされた。其の方は眞地目な方で、先日來病氣に惱んで居られる。私が病氣を訪ねた處が、其方が告白して言はるゝには、平日喜ばせて頂いて居ながら、近頃病氣になつて熱が出たりすると一向お慈悲が喜ばせて貰へぬ、平日お慈悲を頂いて居ながら病氣が氣になつてお慈悲が喜べぬのは何うかと思ふと、しみじみと病床で歎げかれた。其處で私は、いや夫はお互に平素拜讀して居る『歎異鈔』の第九章の御教化で、病氣なれば病氣の爲に喜ばれぬのが我々の性質であると申したら、其方が言はるゝには、いや自分も其の九章であると思つて熟々と拜讀するが何うも充分に喜ばせて貰へぬ。——『歎異鈔』の九章といふのは即ち「天におどり地におどるほどによろこぶべきことをよろこばぬにて、いよ／＼往定は一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきことをあさへてよろこばせざるは煩惱の所爲なり。」

といふ言葉が第十六章にある。即ち我々が口では願力を頼み奉ると言ひながらも、心ではさこそ悪人を助けんといふ願不思議にましますと云うとも、さすが善からん者をこそ助け給はんずれといふ思ひが有る間は、矢張り悪い者でも助けて下さるが善いに如くは無いといふ事になる。今日は餘り事を分けてお話するから筋が立過ぎる嫌ひがありますが、之では眞にお慈悲を頂いたとは言へぬ。成程善いに如くは無いので、佛陀だとして悪い者をお好みなさる譯は決して無いのであるが、抑々佛陀が本願を御建て下された御眞意は善い者を助けようが爲ては無い。此の悪い者をお助け下さらんが爲めてある。夫を「如何なる悪人でも」といふ時は、善いに如くは無いが悪くても助けて下さるとなつて、出来たら一寸でも善く仕度い、善い人間になり度いと、いつの間にやら自分が善くなつて仕舞ふ。猶ほもつと際どく言ふ時は、此「でも」の一言で自分が極惡深重の身ながら善い事が出来るやうな氣になり、道徳上自分が善い者であるかの如く取違えて仕舞ふのであります。

偈て然らば自分で善い事が出来、光が見えるかと言ふに必ず突當る。突當つた時は如何に考へるかといふに、如何なる惡人でも助けて下さるのだから、善いに如くは無いが、此の儘でも見捨てゝ下さらぬのであると、惡人でもが已を得ずの捨て言葉になつて仕舞ふ。之では何うも難有く無いのであります。善い者を助けて下さるお慈悲であるが、悪い者でも見捨て下さらぬのであるとなると、悪い者がお招伴になつて仕舞ふ。悪くすると、悪い者でもお見捨てが無いのであるといふ寛容の言葉になり、悪くても可いのであるといふ如き横着に流れ

り。しかるに佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよくたのもしくおぼゆるなり云云といふ平素お互に拜讀して居る處であります。　　で此章を拜讀して喜べいでも見捨て、下さらぬと思ふものゝ何うも心淋しいと話された。私は此の話で共々に喜ばせて頂き度いと思ふのであります。實は『歎異鈔』の此の御言葉を「喜べいでも助けて下さるのだ」と取ると甚だ心淋しいのである。一寸考へると『歎異鈔』の九章は、唯圓坊が「喜べぬ」「急ぎ淨土に参り度き心が無い」と言はれたに對して、親鸞聖人が俺も喜べぬ、俺も急ぎ淨土に参り度き心が無い、が喜べいでも助けて下さるのである、急ぎ参り度き心が無くてもよいのである」「と言はれたと取れるのであるが、併しさう取るとお慈悲が冷かになつて今の方の如く甚だ物足らぬ氣持になるのである。夫では「喜べいでも助けて下さる」「急ぎ淨土に参り度き心が無くてもよいのだ」と言つて居ながらも、言葉の上にな少しの力も無い。其の力の無くなつて來る點は失張り此の「でも」一言である。「喜ぶに如くは無いが喜べいでも助けて下さる」「急ぎ参り度き心の起るに如くは無いが、起らいても見捨て下さらぬ」と思ふからであります。

處が私も其後熟々味はして貰ふて見るに、『歎異鈔』の九章にはそんな事は一つも書いて無い。實は一應讀んては氣が附かぬ程此處の所を手強くお書きなされてあるのであります。親鸞もこの不審ありつるに、唯圓坊おなじこゝろにてありけり。よく／＼案じ見れば、天におどり地におどるほどに

喜ぶべき事を、よろこばぬにていよく往生は一定とおもひたまふべきなり。

「喜ぶべき事も喜ばぬにて彌々往生は一定」と仰せられてあるのである。「喜ぶべき事を喜ばぬにて彌々往生は一定」と仰せられてあるのである。「喜んでこそ往生は一定」と仰せられても仕方無いに、「喜ばぬにて往生は一定」とは何たる有難い言葉であらうか。之は唯此の言葉だけ聞いては實に驚くべき程偉い言葉であります。「喜ばぬにてなく喜ぶぬから助ける」と言つて下さるのである。又次に、

喜ぶべきことをおさへて喜ばせざるは煩惱の所爲なり。しかるに佛かねてしめて煩惱具足の凡夫とおぼせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときわれらがためなりけりと知られて、いよくたのもしくおぼゆるなり。「煩惱具足の凡夫でも」おぼせぬ。佛兼ねて知し召して「煩惱具足の凡夫、御恩の喜ばぬ者を」と言つて下さるのである。であるから他力の悲願は斯の如き我等が爲なりけりと頂く事が出来るのであります。處が私も茲の處が今迄長い間解つたやうで、解からぬやうで、動もすれば此方の心に都合の善いように聖人の方から同じて下されたものゝ如く頂いて居た。今から思へば實に横着な頂き方であつた。「喜ばぬでも助けて下さる」「悪い者でも助けて下さる」と言ふのなら、本願の正意、本願の眞意といふ事は無くなつて仕舞ふのであります。偕て一度此の點に氣が附いて『歎異鈔』を頂いて見ると、始から終迄皆之である。先づ第一章には如何お示し下されてあるか、といふに、

彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつてゐるおこる

とき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。彌陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆゑは罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがため願にてまします、しかれば本願を信ぜんに、他の善も要にあらず、念佛にまざるべき善なきゆへに、惡をももてるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにと云ふ。

抑々如來の本願は罪惡深重煩惱熾盛の衆生でも救はんとの御本願では無い。其の罪惡深重煩惱熾盛の衆生を救はんとの御本願である。我々極惡深重の衆生其者の爲めに建てた本願であると言つて下さるのである。サア斯うなると第九章を始め、『歎異鈔』全體が何處に一點浮いた言葉は無いのであります。

初に戻りてお話するに、我々は、「悪い者でもお助け下さる」といふと、自分が其の惡人である事を忘れて、直ぐ善い事をするに如くは無いと考へる。斯くして善いが出来ると思つて居る間は何氣なく暮して居るが、彌々苦しんで行けぬとなると、斯の如き惡人でもお救ひであると投げ遣りに考へる。すると信仰は苦しみの極になつて頂くのであるかといふに然うては無い。我々は人生に執着してまだ苦しむ前も佛より御覽下さると、お慈悲に反對々々に奔つて居るのである。此世の我々の生活は佛より御覽下さる時は常にお慈悲に離れよう／＼として居るのである。我々は常に信仰を求める、お

慈悲を求めると言つて居るのであるが、其の求むる心も實は

自分が樂になり度い爲め、安神を得度い爲めに、自分勝手に極いて居るのである。洗つて見れば實に斯の如き淺間しき我々である。然るに佛の本願は其者が可哀い、其者を助けると言つて下さるのである。此の廣大願心があればこそ我々如き罪業深重の者が、此者をこそ哀れましますお慈悲で有つたかと喜ばせて貰ふ事が出来るのであります。

次に又九章の次の言葉には、

また淨土へいそぎまいりたきこゝろのなくて、いさゝか所勞のこともあれば死なんずるやらんこゝろぼそくおぼゆることも煩惱の所爲なり。

病氣になつて死なんずるやらんと心細く思ふのも、熱が出て苦むのも皆煩惱の所爲である。

久遠劫より流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、未だむまれざる安養の淨土はこひしからずさふること、まことによく／＼煩惱の興盛にさふるふにこそ。

實に有難い言葉である。病氣になつて喜ばれぬと苦にするようでは、まだ能く／＼煩惱の興盛に候にこそとは言へぬのである。此程廣大のお恵みを頂いて居ながら夫が病氣の爲めに喜ばれぬ。喜ばれぬてこそ彌々煩惱の興盛に候にこそである。

なごりおしくおもへども娑婆の縁つきてちからなくしてをはるときにかの土へはまいるべきなり。

此の煩惱の興盛の身は死んで極樂に生るゝ事を喜ぶぬ。いつ迄も此の世に執着して名殘惜しく思ひながらも、命了れば彼

の土へは参らせて頂くのである。

いそぎまいりたきこゝろなきものをこゝろにあはれみたまふなり。

急ぎ参り度き心の無き者でもおぢや無い。急ぎ参り度き心の無き者を、殊に哀れみ給ふのである。實に有難い御教化であります。親の方よりは一刻でも早く来い／＼と思つて下さるのであるが、此方は一刻でも遅く親の許に行こう／＼と考へて居るのである。親の方では如何に情け無く覺し召す事で有らうか。如何にも煩惱興盛の我々である。が娑婆の縁盡きて力無くなして此世を終り、いや／＼ながらも淨土に参らせて貰へば、其處には大慈大悲の親が待つて下さる。其の親は急ぎ参り度き心の無き者でもおぢや無い。急ぎ参り度き心の無き者を殊に哀れみ下さるのである。もう斯うなると一點の餘地も無い、實に難有きお示しであります。佛の本願は十方衆生老少善惡一切をお救ひ下さると聞く時は廣い事のやうに思へども、本願の眞意は實に此の一言に在る。斯く我々罪業深重煩惱熾盛の胸中へ一點の餘地なく引きつけて御呼懸け下さる處が、實に本願の御眞意であります。

猶ほ話が細かくなりますが、其本願の眞意は何處に顯はれてあるか。といふに兼ねて言ふ選擇本願が之であります。法然聖人が選擇本願にお氣附きなされた一念は何處であるか。我々は修行や戒行や座禪や乃至孝養父母奉事師長では助からぬ者ぢやによつて、佛兼ねて此事を見援いて、諸有戒行や修行や乃至孝養父母奉事師長を悉く選ひ捨て、南無阿彌陀佛の一つを以て助けんと言つて下された點にある。其の南無阿

彌陀佛の一つを選び取つて下された所以のものは、即ち此の罪業深重煩惱熾盛の衆生を救ひ下されんが爲である。之を『歎異鈔』で頂くと、今の第九章に「佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたる事なれば」といふが之である。此の「佛かねてしろしめして」といふが選擇本願であります。去りながら茲に注意すべき事は、佛兼ねて知ろし召して煩惱具足の凡夫と仰せられたればとて、惡を造りても構はぬ、罪を犯してもよいと仰せられたのでは無い。が我々が本來斯くの如く淺間しき者なる事を兼ねて知ろし召して、此者の爲に御起し下されたのが選擇本願である。之を釋迦の抑止といふ方より言ふと、彌陀の本願は斯くの如く我々凡夫惡人の爲に立て下されたのであるが、釋尊は更に之に附け加へて「唯五逆と、正法を誹謗する者とを除く」とお戒め下された。之は我々が今の如く、惡を造りても構はぬ罪を犯してもよいと邪見に陷るのを戒め下されたのであるが、もとゞ彌陀の本願は初めから我々が五逆十惡の惡人なる事を見通しての御本願である。我々は茲を頂かねばならぬのであります。然るを此の本願の起りを頂かずして、「惡くても善い」「惡人でも助けてある」と、恰も惡を許されたる如く思ふのは、此の本願の慈悲の深い事に氣が附かぬからである。此の慈悲の深い事を頂けば、佛兼ねて知ろしめして煩惱具足の凡夫と仰せ下されてあるのである。此の一言は實に言ふに言はれぬ有難い言葉であります。

之を振り反つて『歎異鈔』で頂くと、第三章に宣はく、善人なをもて往生とく、いはんや惡人をや。

善人でも助ける、況んや惡人は必ず助けるとの仰せである。しかるを世のひとつねにいはい、惡人なを往生す、いかにいはんや善人をやと。この條一旦そのいはれあるにいたれども本願他力の意趣にそむけり。

然に世人は常に思へらく、「惡人でも助かる、如何に況んや善人は無論の事である」と。是れ即ち今の「惡人でも助けて下さるが善いに如くは無い」と考へる人の事である。けれども之は彌陀の本願他力の眞意より頂けば、全然方角違ひである。其の譯は

そのゆへは自力作善のひとはひとへに他力をたのむことろかけたるあひだ、彌陀の本願にあらず、しかれども自力のことろをひるがへして他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生をとぐるなり。

本來自力作善の人は彌陀の本願の正機ぢや無いからである。けれども一旦自力の可かぬ事に氣が附いて、他力を頼み奉れば眞實報土の往生を遂る事が出来る。

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなることあるべからざるをあらはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因なり。云々

實に有難い御文であります。今も申すが如く佛の本願の正意は、煩惱具足の我等が何れの行にても生死を離る可らざるを哀れみ給ひての御本願である。然れば惡人が正機ぢやと言つて下さるのである。然るに自分が其の煩惱具足の惡人なる事を忘れて、惡人でも助けてあると言ひながら、善をする

直ぐ次に、

踊躍歡喜のことろもあり、いそぎ淨土へまいりたくさふらはんには、煩惱のなさやらんとあやしきさふらひなましと云々

上來度々繰返す如く、佛は煩惱具足の凡夫でもと仰せらるゝのぢや無い。煩惱具足の凡夫を、言つて下さるのである。然るに踊躍歡喜の心もあり、急ぎ淨土に参り度き心が有るならば、却て煩惱が無くて本願に洩るゝては無きかと怪しく思ふといふ御示しである。實に手強い御教化であります。斯くの如く我々は一寸でも自分で喜ばふと努めるては無いぞ、唯此の廣大の慈悲を仰げ、唯此の煩惱具足の衆生を哀れみ給ふ慈悲に氣を附けよ、とお知らせ下されたのが親鸞聖人の教化であります。

下

猶ほ此の第九章を拜誦しつゝ、言葉の口調で同時に氣が附いたのは、『歎異鈔』の第十三章であります。十三章には如何は示し下されてあるかといふに、少し話が前後しますが氣が附いた順序で簡単に申し上げますれば、

本願にほこるることろのあらんに、つてこそ、他力をたのむ信心も決定しぬべきことにてさふらへ。

或は私の今いふ方が間違つてゐるかも知れぬが、私は今迄茲の處をうっかり讀んで、我々如き罪業深重の衆生は、此方が本願に誇ればこそ他力を頼む信心も決定出来るのかと思つて居た。今度氣附かせて貰うて見ると、我々が本願に誇るやうな

に如くはあるまい杯と思ふて居る者は、此の本願の正機に洩れる。佛は惡人が正機ぢや、惡人が可哀想ぢや、煩惱具足の我々が生死を離る可らざるを豫て見抜いての本願ぢやと言つて下さるのである。然れば他力を頼み奉る惡人最も往生の正因であるとは、實に何處から何處迄も有難いと思召てあります。

又前に戻りますが九章の終りに、いそぎまいりたきことろなきものをことにあらはれみたまふなり。これにつけてこそいよ、大悲大願はたのもしく往生は決定と存じさふらへ。

我々は未來淨土に生れると聞いても喜べぬ、急ぎ淨土に参り度き心としては微塵も起らぬ。けれども此の喜べぬにつけても斯の者を兼ねて知ろし召しての御本願、急ぎ淨土に参り度き心の無き者を殊に哀れみ給ふ慈悲と氣が附けば、これにつけてこそ大悲大願は彌々頼母敷く、往生は決定と喜ばせて貰ふ事が出来るのである。殊に「これにつけてこそ大悲大願」の「これにつけてこそ」を能く頂かねばならぬのであります。併しながら喜べぬから助けて下さるのである杯といふ邪見に陥つてはならぬ。本來ならば天に躍り地に躍りて喜ぶ可きが當然なのである。法然聖人は「淨土を願ふ行人は病患を得て偏へに之を樂む」と仰せられて、喜ぶ可きが當り前なのである。處が其當り前の事が喜べぬにつけてこそ、此の喜べぬ奴を殊に哀れみ給ふ慈悲と頂いて、喜ぶ心の起らぬにつけ彌々喜ばせて貰ふのである。斯くの如く『歎異鈔』の御教化には一言一句無意味のお言葉が無いのであります。猶ほ申しますと、

淺間しき思ひが有るにつけてこそ、彌々他力を頼む信心も決定する事が出来るのである。即ち丁度先程いふ急ぎ浄土に参り度き心の無きにつけてこそ、彌々大悲大願は頼母しく候へといふ御文と同じであります。佛が煩惱具足の惡凡夫を助ける本願ぢやと言つて下さると、ばや直ぐに其のお慈悲に甘へて本願に誇るやうな横着な心の我々である。ぢやによつて此者を殊に哀みます本願の恵みであると頂くと、玆の所が彌々有難いのであります。

話が少し複雑になりますが、嘗て山形の岡田彌作氏が信仰に入られた時、先程申した「急ぎ参り度き心のなきものを殊にお哀れみ給ふなり」の「殊に」の二字と、此の十三章の少し前の「願にほこりてつくらんつみも宿業のよほすゆえなり」の御文とを非常に喜んでよこされた。考へて見るに、我々が罪を造るのが宿業であると同じく、佛陀が我々極惡深重の惡人を助けて下さると聞いて願に誇りて造る罪も矢張り宿業の故である。解り易く言ふと、親が子供を可愛がる。子共は甘へて親の言ふ事を聞かぬ。親は子供が甘へても仕方が無い、甘へるのが彼の子の性質である。彌々子供を可愛がつて下さる。之と同じく我々は、此の罪業深重の有様を見るに見かねての御本願と頂きながら、此の本願に對しても猶ほ誇りの心を起す。誠に淺間しき限りであるが宿業の催うす所仕方が無い。今の續きには如何にお示し下されてあるかといふ

願にほこりてつくらんつみも宿業のよほすゆえなり。さればよきこともあしきことも、業報にさしまかせてひとへ

のさふらひしなり。云々。

此のお言葉を受けて、我々は善いも惡しきも皆業報ぢや、此の業報の如何に係はらず、佛は此者を助けて下さるのであると、輕るく頂いては本願の正意は頂けぬのである。我々は動もすると此の業報の仕て見様無き者、其者を本願の不思議にて助け給ふのであると聞く時は、自分の特物を人に任かした氣になつて、善い氣で居る。之では肝心の本願のお慈悲といふ事が毫も頂けて居ないのである。我々は當に業報で仕て見様の無い人間であるのみならず、此の業報によれば必ず地獄に落ちつ可き身の上なのである。然るに其の地獄一定の業報の我々を佛は本願の不思議にて助け給ふといふのである。斯く頂く時は如何にも罪業深重の我が身なりけりと知られて、彌々本願の不思議を喜ばせて頂く事が出来るのである。聖人は又『歎異鈔』末文に宣はく。

聖人のつねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親戀一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと。

「此の若干の業を持ちける身にてありけるを助けんとおぼしたちける本願の忝さよ」とある玆を能く頂かねばならぬのであります。玆を確かり頂かねと、罪業深重の我身であるといふ『歎異鈔』の御教化が身に迫まつて頂けぬ。佛の大悲は惡業が有つても構はぬぢや無い、我々は惡業が有つても我身としては何とも自分に仕て見やうの無い者であるから、阿彌陀佛は大悲大願の不思議にて、此者を殊に助けると言つて下さる

に本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはさふらへ。唯信鈔にも彌陀いかにばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なればすくはれがたしとおもふべきとさふらふぞかし。本願にほこるこそろのあらんにつけてこそ他力をたのみ信心も決定しぬべきことにてさふらへ。云々。

此の廣大の親が居て下さると承はれば、直ぐ之に甘へる横着心の我々である。誠に勿體ない限りであるが、宿業の催うす所何とも仕方が無い。が之につけてこそ彌々此者を見捨て給はぬ廣大のお慈悲が有難いと、玆に氣を附けて喜ばせて貰ふのであります。

又今朝も勤行の時氣を附けて喜ばせて貰うたのであります。が、同じ十三章の初めに、

よきことろのおこるも善業のよほすゆへなり。惡事のおもはれせらるゝも惡業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには、兎毛羊毛のさきにぬるちりばかりもつくるつみの宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき。またあるとき唯圓坊はわがいふことを信ずるかとおほせのさふらひしあひだ(中略)なにごともしろにまかせたることならば、徒生のために千人ころせといはんにすなはちころすべし。しかれども一人にてもころすべき業縁なきによりて害せざるなり。わがこそろのよくてころさぬにはあらず。また害せじとおもふとも百人千人をころすこともあるべしとおほせのさふらひしは、われらがこそろのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて、本願の不思議にてたすけたまふといふことをしらざることをおほせ

のである。斯くの如き廣大の本願の眞意と氣が附けば、益々我身の惡業が思ひ知られて、彌々有難いのであります。

大分話が長くなりますが、能く地方などへ参ると斯ういふ質問を受ける事がある。昔の方の説教を聴くと、此世の苦みは皆な過古世の業報であると言はれる。又近頃の若い方は、何もかも佛のお恵み故、悪い境遇の來るも佛の御手引きである。自分が悪い事をするのも、佛の御引き廻はしてあると言はれる。之は何ういふものかといふ風の質問が度々あります。之は何うかと言ひますに、若し此世の一切が過古世の業報斗りて、本願のお恵みが無いならば、善因善果惡因惡果の道理によつて、我罪業深重の衆生が信心が頂ける筈は無いのである。さればと言つて、提婆阿闍世の逆害も皆佛の御方便であるといふものゝ、自分が惡事を行ひながら其罪を佛陀に歸して之も佛の御方便であるなどと言ふ事は決して無い。其處で此の間に水際立て、お示し下されたのが、今の「若干の業をもちける身にてありけるを」の御文であります。我々は久遠劫來惡業に繫縛せられて、我々の爲る事なす事に惡業を離れた事は兎の毛の先の塵程も無いのである。處が佛は其者、其の惡業有る者を殊に哀れみ給ふのである。惡業の有る無しに係はらず、お救ひ下さるのぢや無い。其の惡業の我々なればこそ、佛は此者を特に哀れませ給ふのである。而して此者を助ける爲に佛は廣大なる本願を以て始終我々の惡業に付き添ひ、附きまつはつて我々を方便引入して下さるのである。「そくばくの業をもちける身にてありけるを、助けんとおぼし立ちける本願のかたじけなさよ。」我々は我が身の上の惡業を

思へば一足にても動きのつかぬ身の上である。然るに佛の本願は此の罪業深重の私を救はうとて夫から夫へと我々の業報に付きまづはつて居て下さる。佛の本願の御力は我々の罪業の重きよりも猶ほ重い。『和讃』に宣はく、

願力無窮にましますば、
罪業深重も重もからず、
佛智無邊にましますば、
散亂放逸もすてられず。

我々は自分の罪の深い事を忘れると、慈悲のいかに有難いかも頂けぬ。實に罪業深重の此身なれども、佛の願力が御手強き故、「罪業深重も重もからず」である。我々は實に無明煩惱の塊なれども「佛智無邊にましますば、散亂放逸もすてられず」である。

偕て斯く本願の御真意を頂いて見ると、實に有難き慈悲であります。繰り返し申しますが初めにも申すが如く、「惡人でもお助け」と頂くと、直ぐ裏から「善いに如くは無い」といふ思が起つて、自分が罪惡深重の者である事に氣がつかぬ。それといふも自分が一角善い事が出来る積りで居るからであります。佛の本願は初めから我々が何も出来ぬ罪惡の衆生なる事を知りし召しての御本願である。我々は茲の慈悲に氣が附くと、惡人でもなどいふ氣樂な事は言つて居られぬ。實に斯かる惡業の塊めを救はんとし立ちける本願の忝けなさよと頂かせて貰ふばかりであります。此の廣大の御真意を頂くと、如來の本願は惡人でもお助け下さるのだから、惡をして構はぬなどいふ横着な心は起つて來ぬのである。惡をして構はぬぢや無い、我々にはもとゝ罪業深重、煩惱熾盛、地獄一定の淺間しき身の上なのである。爾るに佛の本願

は此の淺間しき有様を御覽じて、其者が可哀想ぢや、其者を助けると呼んで下されたのである。而して其の本願の御力が我々の惡業よりも強い故に、今度は此の惡業の塊が往生を得させて頂く事が出来るのであります。さて斯く廣大なる本願の慈悲と氣がつくと、我々は之を頂くも頂かぬも無い。如來の本願は頂き度い時頂くのでは無くて、此の御真意に氣が附くときは片時たりともちつとし居られぬのである。あゝ今迄此の廣大の慈悲を無にして居たとは、實に勿體ない事であつた、此の如き若干の業を持ちける身にありけるを助けんとし立ちける本願であつたか」と、氣のつく一念に直に喜ばせて貰ふのであります。

猶ほ今日は一つ申度い事があります。夫は從來『歎異鈔』を拜讀する上に就いて古人の注意せられた事がある。故香月院講師は此の『歎異鈔』は貴い聖教であるが、無宿善の者が讀む時は、恰も子供に正宗の名刀を持たせたる如く、危險であるから注意をせねばならぬと申されてある。而して之を言ふ時に、香月院講師は『歎異鈔』卷末の

右斯の聖教は當流大事の聖教爲るなり。無宿善の機に於ては左右なく之を許す可らざる者なり。
の文を、『御一代聞書』の
一、信もなくて大事の聖教を所持の人は、をさなき者につるぎをもたせ候様に思召候。その故は劍は重寶なれどもをさき者もち候へば、手を切り怪我をするなり。持て能き人は重寶になるなりと云。

の文に引き合はせて申されてあるのであります。すると其後

の了祥師と申す方が非常に之を非難して言はれてあるには、夫は大なる間違ひである。蓮如上人が『歎異鈔』卷末に當流大事の聖教と仰せられたのは、『歎異鈔』が本願の正意、本願の生粹を示された聖教であるから、大事の聖教と言はれたので、毫も危險の意味が有るのでは無い。又『歎異鈔』に惡人々々と言はれたからとて非常に之を恐れるが、之も眞の大惡人のやうに思ふからである。『歎異鈔』の惡人は本當の惡人の事ぢや無い。信仰上からは慈悲に氣が附けば、誰れも皆な惡人である。今日の言葉で言へば、自覺上の惡人である。法然聖人では十惡の法然房と仰せられてあるのである。何もさう『歎異鈔』を恐れるに及ばぬと言はれてある。私は從來此の兩師の言を常に照し合はせて喜んで居たのであります。今朝偶然に氣づかせて貰ふて見ると、矢張り香月院講師の言はるゝ方が本當である。今朝勤行の時に『御一代聞書』の今の御文を拜讀して見ると、「信もなくて大事の聖教を」と言はれてあるのである。すると『歎異鈔』卷末の「當流大事の聖教云々」の蓮師の言葉は、何うしても危險の意味で言はれたものである。何故危險であるか。信も無くて此の聖教を振り廻はすと怪我をする。先程申す如き惡人でもお助けである坏といふ間違ひは、信も無くて此の聖教を讀むから起るのであります。

處が了祥師の言はるゝのも理屈はつく。成程香月院講師の言はるゝ如く、信も無くて此の聖教を讀むと危ぶないが、去れはとて我々如き極重惡人は、此の聖教でなければ、此の正宗の銘刀で切り開いて貰はねけりや、此の廣大の本願の御正意は容易に頂けぬのである。併し了祥師の言はるゝ處はちと言ひ

過ぎてある。了祥師は香月院は惡人々々と恐れるが、『歎異鈔』にある惡人は自覺上の惡人の意味で、眞の惡人の事ぢや無い。既に法然聖人でも十惡の法然坊と仰せられてあるぢや無いかと云はれてある。併しながら眞の惡人ではなけぬは『歎異鈔』は駄目になつて仕舞ふのである。法然聖人が十惡の法然坊と仰せられたのも、唯單に我が身は惡き徒ら者といふ丈けの意味では無い。法然聖人御自身にすれば、耳四郎も自分も更に變はる處が無いと眞に思ふてお出になつたのである。そうでなければ殺人強盜の耳四郎が一言の御說法にお慈悲に氣が附ける筈が無い。若し『歎異鈔』の惡人が唯單に自覺上の意味で、眞の惡人では無いと言ふならば、眞の惡人は何て助かるか。先程も申した如く第十三章には「百人千人を殺す事もあるべし」とお説き下されてあるのである。斯く頂けば信仰上に於ては如何なる大惡人も、又如何なる聖人君子も更に變はる所は無いのである。法然聖人が十惡の法然房と仰せられたは、唯單に自覺上斗りては無い。眞に十惡五逆の大罪人となり下つてお慈悲をお喜びなされたのであります。斯くの如く『歎異鈔』の書き方は絶對的である。だから信も無くてうづかり讀むと危ぶないのである。去りながら信も無くて讀むと危ぶないが、信の無き者に信を下さるのが『歎異鈔』である。親心の眞意を知らぬ者に、親心の眞意を授け給ふのが『歎異鈔』である。此の親心の御眞意さへ眞直に頂いたなら、惡い事しても構はぬなどいふ横着な心は毛頭出て來る氣使ひは無い。親は此者を助けんとて曠劫以來廣大の恵みを以て俟ちて居て下されたか、此方は久遠劫來業報に追ひ廻はされて、今日迄かゝ

る廣大なる御本願がましますとも知らざりし事の勿体なさ
よ。誠に罪業深重煩惱熾盛の我が身なりけり」と氣の附いた時
が、親心の眞意が頂かれた時であります。『歎異鈔』の結文に
は宣はく、

善導の自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた
つねにしづみ、つねに流轉して、出離の縁あることなき身
としれといふ金言にすこしもたがはせおはしませず。され
ばかたじけなくも我が御身にひきかけて、われらが身の罪
惡のふかきほどををしらず、如來の御恩のたかきことをも
しらずしてまよへるをおもひしらせんがためにてさふらひ
けり。まことに如來の御恩といふことをばさたなくして、わ
れもひともしあしといふことをのみまうしあへり。聖人
のおほせには善惡のふたつ總じてても存知せざるなり。そ
のゆゑは如來の御こゝろによしとおぼしめすほどにしりと
ぼしたらばこそよきをしりたるにてもあらめ。如來のあし
とおぼしめすほどにしりとぼしたらばこそ、あしさをしり
たるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、
よろづのこと、みなもてそらごとたはごと、まことあるこ
となきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそお
ぼせはさふらひしか。^{云々}

まこと無き世の中故、まこと無き凡夫故、其者を助けんとあ
る如來の念佛一つがまことである。此の御まことを頂いて攝
取不捨の御利益を喜ぶのが、信の一念の喜びであります。而
して此の一念を繰り返し、初めたるやうにいつも喜
ばせて貰ふが後念相續であります。其處で一念此のお慈悲に

彌陀の心光攝護して、 ながく生死をへだてける。

此方より氣が附いて參らせて貰ふのぢや無い。佛の方より今
か／＼と昔より信心の定る時節を待ちあぐんで、下さるのて
ある。而して彌々定る時節を待ち得て、彌陀の心光攝護し
て、長く生死を隔てしめ給ふのである。蓮如上人は此の最後
の二首の和讃を御法嘆ありて「さて／＼あらあもしろや／＼」
と御掟あつたと申す事であります。さて斯く一念頂いて見る
と、我々は實に罪業深重の身の上であるが、心は至つて樂々
と喜ばせて貰へる。若し自分の淺ましい事を懺悔するならば、
頭を大地につけ泥の中に埋めても猶ほ足らぬ。が夫につけて
も彌々廣大の御本願と仰がせて貰へば其儘ながら佛の懷の中
に住はせて貰うて居るのである。斯くの如く念々あやまりは
て／＼喜ばせて貰ふのが如來本願の眞意を開かせて頂い
た有様であります。其處で今日は『歎異鈔』一部に在る本願の
眞意、聖人一代の御教化の正意を話させて頂いた事でありま
す。今日は殊更に言葉に角を立て、際を立て、申しましたか
ら、或は平日の如く唯うら／＼と喜ばせて貰うて居るよりお
聞づらかつたかも知れませぬ。さりながら今日の話は本願の
ごく生粹の處であるから、何うか皆さんに能くお味ひを願ひ
度い。昨日も九段で此の話をしましたら、去る老人が人の説
教を聞いて喜ばれるのを見ると何となく自分の喜びを心元な
く思ふとて御來會なされてありましたが、非常に喜んで下さ
れました。自分が思ふやうにならねば、ならぬにつけ、彌々此
の様の者を哀れみ給ふ慈悲と頂き、苦しき事が起れば起る
につけ、かねて斯の如き者と見通し下されての本願であつた
かと喜ばせて貰ふばかりであります。何程申しても言葉が切
れさせぬから、之で留めます。南無阿彌陀佛。々々々々々々。

氣がつくと、死ぬ間際迄、煩惱具足の凡夫、惡業盡さざる我
が身である。斯くの如き者を飽迄見捨て給はぬ御本願と喜ば
せて貰ふのである。この理りを最も力強く示されたが、歎
異鈔』の有難き點であります。

偈て斯く頂いて見ると悪い者でもぢや無い。悪い者なれば
こそお助けである。煩惱に苦む者なればこそお救ひである。
度々いふ『和讃』であります。聖人は『高僧和讃』に宣はく、
釋迦彌陀は慈悲の父母、 種々に善巧方便し、
われらが無上の信心を、 發起せしめたまひけり。
釋迦彌陀慈悲の父母が、何うかして助けてやり度いと種々に
善巧方便して下さるのである。又お慈悲を頂いた一念の味を
お示し下されては、

眞心徹到するひとは、 金剛心なりければ、

三品の懺悔するひと、 ひとしと宗師はのたまへり。
如來の御まこと心が心中に届いて、眞心徹到して下された一
念には、如何にも罪惡深重の私でありましたと、恰も毛孔よ
り血を流かす三品の懺悔と同じように、唯懺悔の外は無いの
である。

五濁惡世のわれらこそ、 金剛の信心ばかりにて、
ながく生死をすてはて、 自然の淨土にいたるなれ。

五濁惡世の我等でもぢや無い。五濁惡世の我等こそである。
金剛の信心ばかりにて、其の罪深き者を見捨て給はぬ恵み一
つと頂くばかりで、長く生死の迷を斷ちて、自然の淨土極樂
世界に參らせて貰へるのである。

金剛堅固の信心の、 さだまるときをまちえてぞ、

聖傳

デヤータカ釋尊傳

第二十 良馬の話

世尊ジエタバナにましまし、時、聖ならんと奮闘して遂に
落膽せし僧を諭したまへり。而して是につき因縁を語りて曰
く、「嘗て亦或賢者はたゆみなく努力して、障礙に遇ひし時も
是を抛たざりき。」とて譚を語りたまひぬ。

昔ブラマダツタベナレスに治めし時、菩薩は良種のポード
ヤなる馬の一族に生れたり。されば遂にベナレスの王の壯嚴
なる御馬となりぬ。彼は價も知れぬ貴き黄金の皿よりいとも
美味なる古米を以て養はれたり。彼は快き香にみてる廐に立
てり。其廐は花の刺繡ある掛幕をめぐらし、馨よき花環もて
壯嚴され、金の星光まばゆき天蓋もて掩はれたり。又軒には
消えざる香よき油の燈さへ輝きぬ。

此時に於てベナレス王國を遂にのぞみ冒さんとする王は一
人もあらざりしが、程へて遂に七國の王は同盟し市を圍みぬ。
使をもて「王國を與へよ、然らずば戦端を開かん」との書を送
りぬ。

王は大臣を集めて會議を開き如何に謀ふべきやを談じぬ。
「君直ちに戦に趣き給はんは惡し、かく／＼の騎士を送りて以

て戦ふべし。彼倒るれば、又後の謀を廻らすべし」と答へぬ。
王其騎士を迎へて曰く「汝は七國の王に當りて戦はんとす
るか如何」と。

「大王若し良種のボージャ馬を得ば、戦ふを得べし、七國の
王は云ふも更なり、印度全大陸をも負すべし」と。

「ボーチャはいはずもあれ、汝の欲する馬をとらすべし、い
ざ戦を開かん」と王は勇みぬ。

「甚だよし我王よ」と騎士はいひぬ。暇を乞ひて彼は宮を引
き退きボーチャを牽き出して之に確と戦装を施し終りぬ。
己も軍装を調へ鎧を着し太刀をはき、馬に跨り市を突進しぬ。
電光の如く敵の第一陣に進入して之を打破り、一王を捕虜と
なし、疾驅して歸りて市の護衛に引渡しぬ。

再び彼は出て、第二陣を突きぬ。次に第三陣を破り、如此
くして遂に第五陣まで悉く撃ち滅ぼして第五の王をも虜とし
次に第六陣を突き破りて第六の王さへ捕へたり。時にボージ
ヤは負傷し、血汐ほとばりし出て激しき惱を受けぬ。

騎士はボーチャの傷つけるを見王の門に横たへ、鞍をゆる
め他の馬を御しぬ。ボーチャは出來うる限り、安に身を横た
へ、眼を開きて騎士を見たり。自ら云へらく、彼は他の馬に
鞭うてり、彼馬は第七の陣を破る事能はざるへし。又第七の王
をも虜となす能はじ、さらば我以前になせし効は失なはれて、
騎士自身も殺され、遂には王亦敵の手に落ちん事の口惜しさ
よ、我を除きて他の馬は第七の王も陣も破る能はざるへし。
とて、横はりつゝ騎士を呼び迎へぬ。

「あゝ友よ、あゝ騎士よ、我をあきて餘の馬は最後の陣も王

たり。佛は因縁を説きて曰く、「其時の王はアナンダにして騎
士はナリブツタ、ボーチャは我身なりき」とのたまへり。

第二十一 良き戦馬の話

世尊ジェタバナに於て、失意せる僧を諭したまへり。「嘗つ
て賢者は打撃をうけて煩惱しつゝもなほ努力せりき」とのた
まひて慰さめたまひぬ。

昔、プラマダツタ、ベナレスに王たりし時、以前の如く七國
の王は攻め來りぬ、城を圍みて迫り來りぬ。時に勇士はシン
ド馬兄弟二匹にひかせたる戦車にて戦ひしが、遂に六つの圍
をやぶりと六國の王を生捕りぬ。此時馬は傷つきけり、車上
の武士は王の門に至るまで之に乗り來り、兄なる馬を解きて
馬具をゆるめ、横たへあきて、他の馬を着けて又戦場へと出
て行かんとせり。

時に菩薩なる兄馬は是を見て前章の如く思ひしかば、武士
を呼び戻して此偈を曰ひぬ。

時も處もえらぶなく、

事よき時も難時にも、

良き種の馬は火もてみつ。

他の馬は遂にたじろかん。

戦士は馬を助け起し、是に綱つけて第七の陣を破り、第七
の王を虜とし、城門に歸りて馬を取りはづしぬ。

菩薩なる馬は彼の傍に臥しつゝ、前の如く王に諫言を呈し彼
の最後の呼吸を引きぬ。王は是が爲に厚く葬らひ、戦士を嘉

も獲がたかるべきや、我亦嘗つて爲せし効を滅すべし、我
を助け起せ、我に装へよ」といひつゝ曰ひぬ。

君のみそばに倒るとも、

矢もて痛手を負はざるも、

ボーチャは他より抽んでん、

我を鞭うて、あゝ騎士よ。

騎士は菩薩を起し助けつゝ彼の傷を締めくゝり、全き装を
施して彼の脊に跨り、第七陣を破りて第七の王をも生捕り終
り護衛に渡しぬ。

人々菩薩なる馬をひきて、王の門に行きたり。王出て、是
を見給ひぬ。馬は王に曰はく。

「大王よ七人の王をば殺す勿れ、彼等に誓言をなさしめて免
すべし。我及び騎士のなせる効は騎士一人にのみ酬めたまふ
べし。七陣を突き七王を虜とせる戦士の効を滅ぼすは正しか
らず、賞を施し令を布きて、王國を正義と公平もて治すべきに
こそ」といひぬ。

馬はかく王をとめて説きし後、一呼吸毎に弱り來りて、遂
に終を遂げり。

王は彼の爲に葬式を行なひ、騎士には賞を與へ、七王には以
後此國を侵さじと堅く誓はしめて命を免し各其國に歸しぬ。
彼は國を正義と公平もて統御し、幸多き生を終りしといふ。
師語を次ぎて「かくの如し比丘等よ、賢者は不斷に努力し
て毫もたゆむ事なし、一切無碍にして志を到達す。されば汝は
救済に導びく正しき規定に従ひて得度せし上は、毫も心落す
事なかるべしと、宣ひしに意を失したる僧は忽ち阿羅漢を獲

し、國に正義を行なひ、よき生を送りぬ。

此話を畢りて曰く「其時の王はアナンダにして、馬は佛陀
なりけり」と。

第二十二 淺瀬に於ける馬

世尊ジェタバナに在し、間に、正義の師の下に弟子として入
りし若輩ありけり。すべて心に關し、誠に關する智慧は佛陀
にのみ限られしものなれば、正義の師なりと雖彼の教に従ひ
て、敗穢の念を僧に悟らせん事難し。如何となれば彼は弟子
の眞性に暗ければなり。

此僧は教によりて些の利をも得ざりき、そは他の理による
なり。彼は五百生轉生して鍛冶屋に生れぬ。彼は此永き間常
に純金のみに眼をさらしたりければ、不淨の想を了解し悟る
事難きなり。四ヶ月の間彼は些も此念を起す能はざりき。

正義の師は彼の内弟子に救を與へがたしと知りぬ。「此弟子
は佛陀によりてのみ眞實に導かるべき難治の者たるべし、我
は彼をタターガタに連れ行かん」とて世尊の御許に伴ひぬ。

世尊舍利弗に何故彼を伴ひ來りしかを問ひ給ひぬ。「主よ彼
は四ヶ月間觀念の主問を與へしと雖も毫も悟らんづるけしき
なし、よつて、こは佛陀のみ眞實に導びき給ふべしと知りた
ればかくは伴ひぬ」と。

「汝彼に與へし問題は何なるや舍利弗よ」

「不淨觀なり、佛陀よ」

「あゝ舍利弗よ、汝は人の心識を悟るを得ざるなり。汝今は歸

りて夕暮又弟子を連れに來るべし。」
かくして佛は舍利弗を去らしめぬ。佛はやがて快き座を彼の弟子に與へ、よき衣を着さしめ、佛と共に托鉢に伴なひ、美味なる食事を取らしめぬ。歸り來りて餘りの日中は佛の御座所に共に座をとらせ、夕暮共に僧院を廻り歩みたり。其處にはマンゴー園ありて、池あり。其中には蓮群がり咲けり。此中に一つの優れたる大さのいと美なるがありけり。僧に「立ちて是を見よ」と指し示しつゝ佛自身は室に入りたまへり。僧は花を眺め眺めせしうちに、大聖は其花をば萎らせて敗穢せしめたまへり。僧はそれを眺め入る間に花は色あせて見るかげもなくなりぬ。やがて瓣は落ちはじめぬ。瓣又瞬間に總べて散り果てにき。遂にしへははら／＼と落ちて残るは中央の軸ばかりとはなりぬ。

僧之を見ておもへらく「今此蓮華は一きはめだちて美麗なりき、今は色あせ、瓣はちり、軸のみぞのこれる、あはれ花すら如此し、我身も亦此花の如くにならざらんや、實に形を成せる者は一つとして常住なるなからん、我眼遂に開きぬ」と。世尊彼の實驗せしを知りたまひ、室を出てずして形彼の現前にみせしめて宣はく、

身の執着を止めてやは、

秋の蓮のちる如し、

佛の説かるゝ涅槃へと、

たゞ安靜の道急げ。

偈の終りし時僧は阿羅漢果に達し、嬉さの餘りかく讚美しぬ。

心決定せる人は

惡しき思も滅しつゝ、

最後の生を樂しまん。

命は清く意を制し、

自在を得たり見よ月は

満つるもかくるも無碍こそ、

心の隙をうかゞひて、

入りこむ欲の眞闇をば、

佛は散らさん、ながらに

數千の光明放ちつゝ、

大き日輪さしそへば、

榮光天地に漲りて、

雲を散ずる如くなり。

かくて彼は世尊にまみえて恭禮したてまつれり。長老亦來り、共に／＼手を携さへて佛を辭し奉れり。

此事いつしか僧等の間に喧傳され、彼等は何時もの如く講堂に於て世尊の如此恩徳を讃嘆しつゝ集へり。

「兄弟よ舍利弗尊者は心識の智なければ、其弟子の眞性に暗くして是を度し難かりき。さるを、大聖は無限の智を以て、是に阿羅漢果を得しめたまひしこそ貴けれ、實にも大なるかな、佛の御力は」といひぬ。

世尊堂に入りたまへり。彼等の話を聞きたまひて「其は奇しき事なし、佛は今彼の性を知りし如く前世も然なりき。」とて左の譚を示したまひぬ。

嘗てブラマダッタベナレスに治めし時、菩薩は顧問者となりぬ。

さて或日のことなりき。何時も王の御馬を洗ふ淺瀬へ、野馬をひき來りて、頻りに是をこされる人ありき。

御馬は是を見て大にいきり、いやしき馬を洗へる處へはよも入らじとて水中に踏み入るべくもあらず。

馬夫は王に行きて告げける様、「大王よ君の御馬は水に入らず」と訴へけり。大王直ちに菩薩を召し、「バンジツトよ汝ゆきて、何故馬は水中に入らざるやを檢すべし」と命じぬ。「賢こみぬ」とて菩薩は其淺瀬に到り馬を檢せり、是には何の變れる處もなし。「こは仔細ぞあらん、恐らくば、此馬より先に洗へる馬あるを怒りて水に入るを拒みたるなるべし」とて、馬丁を呼び此事を問ひぬ。

「或馬先に入り浴し居りたり」と彼は答へぬ。

されば菩薩は此馬が此池に浴せざるは彼の虛榮心なり、是は他の池に入るべきなりとていひぬ。見よ人は最良のカレーかけたる精撰せる乳飯を食すとも、とかれおをかれ飽くならん。馬も此池にあまり屢々浴して飽きたれば、他の淺瀬にひき行くべし」とて唱ひぬ。

一つの淺瀬に飽きし後

馬を他の瀬につれ行けよ。

人もあまりに食すれば

いとよき飯も厭ふべし。

馬夫は命のまゝに馬をひきて他の瀬に入れぬ。其處にて馬を浴せしめ、垢を落し洗ひ了りぬ。菩薩王に歸りて右の旨を報じ奉りしに王深く嘉して曰く「彼は馬の意識だに了解せり、彼は賢者なり」と。

世尊是を語り畢りて「其時の馬は彼僧にして、王はアナンダ大臣は我なりき」と因縁を結び給ひぬ。

告白

家庭問題より信仰に入る

都築百太郎

如來聖人の大悲の導により、先生の『懺悔録』を拜讀することを得て多大の教訓に接し、最勝無上の信仰に入ることを得て慶喜の至りにたえず、悦びのあまり信仰の経路を懺悔告白して感謝の辭に代へさして戴きます。

私は貧家に生れ、十二歳の時父を喪ひました。私は小供心にもなぜ私共親子は、かくも不運であるのかと思ひ、世を味氣なく感じました。是は佛法の所謂因縁とか云て、私共が前世の惡因の結果であらう。是れは佛さまの御慈悲にすがりて幸運にして貰ふよりほかはないと思ひ、觀音様の靈驗尊き事を聞き深く信仰し、我家に幸福あらせたまへと一心に祈りました。十四歳の時胃病を酷く煩ひ、到底助かるまじと後生の事が氣にかゝり、寺に參詣して説教を聴聞し、他力本願の尊き事を知り念佛を喜こんで居ました。其内にだん／＼病氣も治りましたから、丁稚奉公にゆきました。奉公中は主用多忙にて寺へも參詣せず、法友知識にも近かづかず、だん／＼信仰はうすくなり、他力の難有き事も忘れてしまいました。二十一歳の時自家に歸り、細々ながら獨立て營業するようになり、此に生活の困難と云ふ事を知りました。自分が豫想して居た

とは全く違ひ、總ての事が皆自分の希望どうりにゆかず、不平不満に堪へられぬ。又生存競争の盛んにして、優勝劣敗の甚だ敷き世の有様を見聞して、恐怖の心を生じ、煩悶懊惱するようになった。

全體私は身體虚弱で神經過敏とても云ふのであるが、些細の出来事に心痛したり、過去を追想して悔やんだり、將來を想像して取越し苦勞すると云ふ風であるから、人よりは煩悶が多いのです。情々思ふにはなぜ自分はいくも意志が薄弱であるのであるが、こんな性質では此生存競争の盛んなる優勝劣敗の甚敷き人生に處してゆくは六ヶ敷い。終には劣敗者となりてはかなき運命を招くであらう。どうか此の性質を矯め直したいと思ひ、精神修養の資となるべき書を盛んに讀みましたれど、格別效力もない。尤も英雄の言行録などを讀みますと、深く感じて勇氣の心が起きてきますが、猶水に畫がけるが如くて直ちに消えてしまいます。其中に人生種々の出来事に遭遇しては益々煩悶を増すばかり、死んだのが幸福であると思ふた事さへありました。是に於て求道の心盛んに發こり、十四歳の頃聴聞せし説教を思ひ出し、再び信仰を喚び起しました。夫より説教にも參詣し、他力安心に關する書籍をも讀み、佛教家名士の講話をも熱心に讀みました。初めの内は無我に他力本願を難有く悦び居ましたが、多く書を讀みゆく内に種々の疑問を生じ、疑問を生ずれば解決を求むる心を生じて、それに關する書を購讀すると云ふ風で、いつしか信仰的なりしものが、研究的態度と變じてしまいました。疑問の重なるものは、大乘は佛説なりや非佛説なりや、靈魂

は滅なりや不滅なりや、地獄とは何ぞや、極樂とは何ぞや等てあります。己れの無學不智なるを知らずして、廣大深遠なる佛教に對し研究的態度をとりたることの今より思ふと愚の極であります。佛教に對するに哲學思想や研究的態度を以てするの非なるに氣付きましたは、常盤先生の『佛陀之聖訓』中の一節に、釋尊が一の妙喻を説きて尊者靈童子を訓誡し玉ひし記事を讀みたるによります。(『佛陀之聖訓』の八十五頁にあり)そこで私は佛教の本旨は實行にある、諸惡莫作衆善奉行是佛教の本義にして、又宗教の根本である。いくら高尚の理論でも實行せざれば何の益もない、佛法は行を貴びて不行を貴ばず、但よく勤行せばたとひ復た寡聞なるも、亦先立ちて道に入ると古聖も訓へたまひた。今日より後は聖賢の訓戒を守り實行せんと志ざした。志ざしは甚だ可なるが如くてあるが、實行は少しも出来ない。決して出来る筈がない、私しのような意志薄弱の者では。しかるに可笑しいではありませんか、少しも實行出来ていなのに、自分は實行しつゝあるように思ふて得意になつて居つた。實に馬鹿氣切つて居るが、其時は氣付かない。今より思ふと自分ながらも呆されてしまふ。斯る底下愚惡の私を如來は深く悲憫し玉ひ、善巧方便して眞實信仰に入るの機縁を與へ玉ひました。それは家庭不和合であります。

家庭不和合、人生是れほど悲しき事はありませぬ。私は六年已前に妻を娶りました。初の内はよかりしか、年月がたつに従て母と妻と衝突するようになり、段々激しくなりてきます。私は非常に心痛して何卒融和せしめんと欲もひ、母を慰め妻を諭し、百方心を盡くしましたが更に効なく、益々激甚

となるばかりであります。こうなると是迄佛法を喜び、聖

訓を難有く思ふた心も皆失せて、瞋恚を起すやら愚痴をこぼすやら、母を恨らんだり、妻を怒り、心内に覆藏して居つた惡念が一時に發りて身心を苦めました。一夜大經の三毒五惡段を拜讀し、私の現在の生活狀態の直寫であると深く感じ、如何にも身の罪惡なるを自覺し、また豫て説教や聖教にて罪惡深重の者と承りてをりましたが、人の事に思ふて吾身の事と思はれなかつた。しかるに家内不和合の逆縁よりして、吾身の罪惡なるを自覺して貰ふた。逆縁即恩寵であります。

昨年の春母が本願寺に參詣したいと望まれましたから、私も聖人の御影前へ跪きつゝ懺悔したいと思ひ、母を奉じて本願寺に參詣致しました。何ぞ信仰に關する書籍を求めんと欲ひ、法藏館の店頭に參り、澤山なる佛書の中で私の目に付きましたは、先生の『懺悔録』と、瀝堂先生の『親鸞聖人』であります。二冊を求めて歸路汽車の中に『懺悔録』を拜讀いたし、信仰上多大の教訓を被りて感泣の涙に咽びました。殊に「しかし眞實この惡人の救済と云ふ事が、他人の事てなく自分のことであると内心に感ずる事は頗る難い。抑々かく極端に惡人の救済を云はねばならぬ理由は、自分が極端なる惡人であるといふ事を自覺したからである云々」の文を讀みて深く感じました。歸宅早々求道の送附を乞ひ、月々拜讀しては幾多の教訓に接し、信念増長さして頂きました。誠に感謝の至りに堪へませぬ。

已上拙筆にて私の信仰の經路を告白さして戴きました。が、是より私の信仰の感想を四五披瀝さして戴きます。

一、五逆の阿闍世や、強盜の耳四郎でさる本願の慈悲には救くはれる。況や私をやと思ふて居りましたが、今思ふと誠に慚愧でありました。現實には親も殺しませぬ、強盜もしませぬが心の内では時々やつて居ます。實に阿闍世や耳四郎にまけぬ惡人です。善人猶もて往生す、況んや惡人をやとの御教化が身にしてみてありがたい。

二、諸ろくの罪科を犯し監獄に繋かるゝ人の事情を見聞する毎に、自分の無事なるを光榮に思ひます。監獄に繋かるゝ人必しも惡人ではない。平穩に暮す私共決して善人ではない善惡は外相の上の事です。内心には同じく三毒と云ふ危險さはまる爆發物を畜へて居ます。何時爆發するやも知れませぬ。彼監獄に繋る人々には不幸にも惡縁に遭遇して爆發したのです。私は幸にも慈光の照護により惡縁に遠ざからしめ、爆發の危險を免ぬがれさして戴きたる事は幾度もあります。私が無事平穩の日暮しをさして戴くは偏に大悲の恩寵と感謝いたします。無明煩惱しげくして、塵數の如く遍滿す、愛憎違順することば、高峰岳山にことならず。外儀のすがたは人毎に、賢善精進現ぜしむ、貪瞋邪偽多きゆゑ、奸詐百はし身にみたり。『本願力に遇ひぬれば、空しく過る人ぞなき、功德の實海満みちて、煩惱の濁水へだてなし。』等の和讃思ひ合されて難有い。

三、斯く自分の愚惡なる事を自覺したならば、人が罵り譏りたりとて自分の眞價を言明したるものと思ふて怒るにはあたらぬ筈であるのに、まだどこか心の底に自分を善き者と思ふて居るとみえ、讃めらるれば心喜び、譏しらるれば心怒ると

云ふ有様です。是で以て彌よ／＼底下の凡愚たる事が證據立てられます。『浄土真宗に歸すれども、眞實の心はありがたし、虚假不實のこの身に、清淨の心もさらになし。』『蛇蝎奸詐の心にて、自力修善はかなふまじ、如來の廻向をたのまては、无慚无愧にてはでせん。』

四、大經の三毒五惡段は私の生活状態の直寫といたゞかれます。我身の罪の深さをも知らず、如來の御恩の高さをも知らずして迷へる私を、釋尊深く憐みましまして、汝の内心の有様日暮しの有様は此通りであるぞ、何んと罪惡ではないか。然るに阿彌陀佛は汝の如き罪惡の者の爲に超世の願を建て玉ひて救ひ下さるやと知らしめ、一乘無上之眞實信海たる二種深信を起さしめんために説かせられたる者といたゞかれます。『釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、我等が無上の信心を、發起せしめ給ひけり。』『娑婆永劫の苦をすて、浄土無爲を期すること、本師釋迦の力なり、長時に慈恩を報ずべし。』

「無始流轉の苦をすて、無上涅槃を期すること、如來二種の廻向の、恩徳まことに謝しがたし。」

五、近頃に至り更に佛力の偉大なるを感じたるは、波亂たへざりし私の家庭が妻の懺悔によりて平和になりました事でありす。私が訓誡しても更に効がなかつたものが、或非常なる事情の爲に妻自身御慈悲に氣付、今まで母様が悪い／＼と思ふて恨みましたれど母様が悪いのではなかつた。皆妾が悪かつたのであると懺悔するようになりました。偏に佛力の御蔭であります。先生の御言葉に、凡夫同志では他人を善くすることとてきねば、他人は此方を善くすることとてきね。唯

一人がためなりけり

園 千鶴子

誠に不思議な御縁で此度皆様に私の過ぐる一年の苦しみの生涯を聞いて頂く事は恐れ多い様で何となふ御耻しめ御座います。先生が是非記載せよとの御手紙を頂戴いたしましたので、只今は之も親様の御仰かと、かしこみて、拙い筆ながらも長い間たどつた苦しみのあとを御話し申し上げます。

實は斯様な心の状態を皆様に聞いて戴くのはあまり心地が進まないの御座います。先生の御手紙を三度程拜見いたしました。御記載下され候はゞ讀者にもいかにばかりの仕合云々が、はしなく只今喜んで書かせて戴く心地がいたしました。と申しますのは私も實は或る信の友の手紙を読みましてはじめて永久の命を見出させて頂きましたものから、と申しましても私の様なにぶい筆でどうして心のまゝが寫せまじよ、亦人様にどう云ふ御感情を起させ申すと云ふ様な事は誠に疑はしいので御座います。兎に角不思議な御縁に任せて先生の御仰せ通り思ひ浮びましたまゝを申し上げます。

私は少き時から順境に送つて居りました誠に仕合な者で御座います。私はどうしても此様な生涯の内にも或る淋しさがいっぱい襲ふて、始終やるせない思ひに過して居りました。と此處に二年餘、長い間なやみの幕に蔽れて居つたので御座います。亦不賛者の多い中からクリスト教の女學校生活をついでて参りましたがまだ信仰が如何なものかと云ふ事を考へず卒業の期まで過しました。私の関りには物質的障害がなか

互に悪い方に引落し合て居るばかりであるとの仰せですが、實にそうです。妻さへも善くする事の出来ぬ人間ですもの、他人などを善くする事が何んで出来まじやう。否々自分を自分で善くすることとてきねのです。いよ／＼願力を仰きまいらせば、自然のことはりにて柔和忍辱の心も出くべしと、誠に難有い事であります。

誠に平凡なる感想ではありますが、私自身の難有く思ふて居りますまゝを告白さして戴きました。斯様の感想の浮びたるも偏に『懺悔録』や『求道』の御蔭であります。謹みて大悲の恩恵と先生の浩恩を感謝し奉る。南無阿彌陀佛。

行 誠 上 人

あまりにも満ちてはくることわりを忘れがはなる秋の夜の月。

かつらみかつまねきつゝ葛尾花おなじ夢野にたち騒ぐらん。

わが年も八十うち川のおじろもりしねるひをまつ翁なりけり。

もとよりも瀾にしまねばちすばの開くや花のさとりなるらむ。

ぬきかふるわづらひもなし夏きても苔の衣はたひとへにて。

曇ぞめのくらまの山のやまざくら夕べは雪とあやしまれつゝ。

さだめなき風にまかせてちる花をばなとばかりも思ひける哉。

たからて御座います。そして此期頃は盛に私の願ひは佛教つもクリスト教の様に盛になるといふに、自分の事を考へず斯様な生意氣な事を考へて居りました。つゞけて専門科へ参る様になりましたから不思議に此の期から俄に友の顔みるのさへいやになりました。果ては自分の存在も分らなくなり、何の爲めに勉強するのやらすべてが不明になりました。遂に私は退校しようと思ひました。其後如何かして此の云ふに云はれぬ淋しさを慰めてくれる友、信の友が欲しいと云ふ念が頻りにつづりました。京都の求道會の方に折々御話を承りました。一向分りませぬで、御説教などがまじ／＼私の頭を亂れさせた心持ちとなりました。其の翌年即昨夏或る友が法悦の人となりました時、私は御耻しい事です。が嫉妬心が非常に起り、遂に私は此の友の様に不幸な人と生れて來たならばすぐに御安心が戴かれやうと思ひました。何と云ふ淺ましい心でせう、却て幸な身にして不幸を乞ひ願ふとは。

其後私は結局信仰は人から得るのではなく自身が思ひ様次第であると決め込みまして、遂に私は造つた一時的の信仰を得て喜びました。嘗て先生が御念珠の御譬へを話して下さつたのと丁度變りないかと存じます。失つた御念珠が自分にはどうしても分らなくても、人からあまり「ある」「そこにある」と云はれると充分意得が出来ないものとしてしまつた御話と少しも變りはありません。斯様な調子で私は昨春當地で日頃の希望が達しましたので、満足に満足で矢張當地のクリスト教の學校へ入學しました。一學期は夢の様に過ぎて夏休みがすぐ参りましたので京都で過す身となりて歸京い

たしました。あゝ彼の夏休、私は只今とても筆にすることは出来ませぬ、全く狂氣沙汰の生涯を送りました。結局人生の意義が分らず、後半生が眞暗くなりて果ては死が戀しくなりました。とてもこの苦しみは表はせませぬから皆様の御推察を願ひます。清く汗へきつた八月十五夜の月下で私は信の友即心に嫉みし友に、苦しみ惱みに襲れつゝある我を願はくば死に至らしめよと心から呼びました。友の慰、ありがたい本、先生の『懺悔録』など、すこしも分りませぬでした。斯様にして恐しい物凄、淋しい苦しい日を過して遂に第二學期を迎へました。私は意を決めまして、到底私には他力の御教へがあまりたよりなく、又たむづかしい様に考へまして、遂にたとへ親兄弟に背いても斯様な苦しみの半生を送る事は出来ぬと思ひましてキリストに依て救ひを求めむ事を切に思ひ頻りに眞面目に教會へ行きました。けれど矢張森川町が慕いのて月に一度か二度ぐらゐ参りました。

此の當時は私は生ける信仰、高い理想的信仰を得て立派な純白なクリスチャン、ライフを送りましたと思ひました。只今思ひますと『信仰之餘瀝』中の詩的信仰を遂げたいと頻りに無理な事ばかりを考へて居りました。私は神が如何しても眞の親の様に思はれませぬ、矢張佛様が戀しいなつかしい親しい念がいたしまして、亦クリスト教義も満足する事がむづかしいと思ひました。此正月は斯様な思想の内に過ぎ三學期になりまして、學校の求道部から牧師様が熱心な説教傳導を求道者なる私達へ幾度も開いて下さつたので御座います。神の存在から信仰までの道を理論的に説きました時、私は無闇に

佛様が慕しくつて戀しい様な心地が頻りにいたしましたが、然し佛様と私の間に或る幕がある様に思はれました。一方では頻りに壓制的傳導をせられますので、私は頭が亂れ、佛様戀しい、こんなに慕つて居る子をすぐ手を取りて彼の温い懷に入れて下さつてもよかりそうなのに、なぜ私だけをこんなに繼子扱ひにされるのであるかと……。

全體私は宗教上で皆様の仰る罪惡の感念が少しもありませんでした。御文章を戴く毎に五濁惡世の凡夫とか、罪惡深重などの文字は私は大嫌で、そんな人て私だけはない、始終人の身の上を思ひ、偽を云はず人を困らせた事のない私、なぜ佛様は罪惡／＼と仰しやるのであろうか。どんなに罪惡を犯した者でも親たるものは一層哀みを以て心配するのは親の自分、義務としても當然の事であるまいかと、心から斯様な思ひをして、矢張學校で聞くクリストの十字架の贖の意が私にはわかりませんでした。此時もしも罪惡の感念が合點が行けば必つと御安心が頂けるに、私にはどうして罪がわからないのであろうと此事はかり思つて居りました。「求めよ、然らば與へられ、尋ねよ然らばあひ、門を叩けよ然らば啓るとを得ん」と、亦牧師はもし幸にキリストの贖を受けて神の絶体が認められた時には、己と比べて神が親しい一方には或恐しい様な心地がする、其れ即ち罪の潜んで居るからであると思はれました。私は其夜中ねむられずもだへました處、其翌日私と全様に佛様を永久の父様としたいと云ふて居られる友が参りましたので、私の學校に於て聞かされた事を話し、實に異教徒の内に一人淋しい思ひなどを告げました所「あなたは佛様が始終守つて私を慰めて下さるのでしょ。私の様な者に何をせよ然らば助けんと仰しやつて下さつても到底も出来ませぬに、……嗚呼ありがたい南無阿彌陀佛……今迄企て行ひました事は凡て虚偽の塊まり、罪惡の基礎を日々作つて居りました。親鸞に於きては只念佛して」云々の御言葉さへあるに私はどうして……只だ忘れ勝ちて、御念佛さへも中々口に稱へる事が出来ない淺ましい私を、此の罪人を終に佛様のきわとい御手廻し、御はからひて大船に乗つて、梶とる世話もなく淨土の彼岸に到る身の仕合せ者とさせて頂きました。まあ私は何と幸福な者で御座いますよう。提燈行「暗夜」愛顧「一燈」とか云ふ文句を恰度此頃味はさして戴き、日々感謝と懺悔の中に安々と暮らせて戴いて居り升。誠に前後した文字を連ね、くどくしく申し上げましたとを幾重にも皆様に御詫び申します。

大谷法主御上京淺草本願寺にての
御親教を聴聞し待りて

みすがたを拜がみまつるもたふとくに御教へさし
得しめぐみられしも。

御報謝のみためにはげめとありがたき化身の御言葉
めくみと思ほゆ。

名號をとなへまつりてかりの世に彌陀のめぐみに
たよるうれしさ

て居て下さるではありませんか」と云ふ事を聞きました。けれど私の心にはまだ本當に佛様が認られてない者で御座いますから、此事を聞きましてから私は一層佛様がぢれつたくて仕方がありませぬでした。日ならず私は餘儀なく親に偽はりを申しまして非常に私は其後氣味悪くてたまりませぬ。何やがやて私は身の置き處さへなくなつた様な氣が致しまして困り果て、居りました處へ、京都から「道光」を送つて下さつて何心なく『歎異鈔』を拜見しますと「彌陀の本願を案ずれば偏に親鸞一人がためなりけり」彌陀の五劫思惟の願その詮なくやましまさん」の聖人の御言葉が、私の暗中にさまよふて居た處へハッキリとした光を照して下さつた様な心地が致しまして、永の命を下さつたので御座い升。長い……間の罪惡の感念が一瞬間に私を攻めて身も心も破り裂ける思ひが湧き出て、只此の親様に五劫思惟の御苦勞をかけたのも此のいたづら娘があるばかりとヒシ／＼思ひ、懺悔の涙は實にぬぐひもあへず夜中止らないで、もう御詫びする事も出来ない位でした。此の時私の心には御慈悲に満されたる御まなざしの私の慕つて居たるほんとの父様の御姿があり／＼と見えまして、私は御膝下で懺悔の外何も申し上げられませんでした。斯様な状態に居りますと、又た仰しやるには罪惡深重煩悩熾盛の汝を助けんが爲めの願にして、本願を信ぜんには他の善も要にあらず念佛にまざるべき善なき故に、惡をも恐る可らず彌陀の本願をさまたぐる程の惡なきが故に云々と。私は此のありがたい御言葉が却て苦しい様に思はれますと、私を撫る様に、我に任せよ、と仰しやつて下さるでは御座いませんか。まあ、何處ま

講義

歎異抄

近角常觀

第十一章

一經釋をよみ學せざるともがら、往生不定のよしのこと。この條すこぶる不足言の義といひつべし。他力眞實のむねをあかせるもろ／＼の聖教は本願を信じ、念佛をまうさは、佛になる、そのほかなにの學問かは往生の要なるべきや、まことにこのことばにまよひはんべらんひとは、いかにもいかに學問して、本願のむねをしるべきなり。經釋をよみ學すといへども聖教の本意をこゝろえざる餘、もとも不便のことなり、一文不通にして經釋のゆくちもしらざらんひとの、となへやすからんための名號にておほします、ゆゑに易行といふ、學問をむねとするは聖道門なり、難行となつて、あやまて學問して、名聞利養のおもひに住するひと順次の往生いかあらんずらんといふ證文もさふらふぞかし。當時專修念佛のひと、聖道門のひと、評論をくぼだて、わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はおとりなりといふほどに、法敵もいできたり、謗法もおこるなり、これしかしながら、みづからわが法を被謗するにあらずや、たとひ諸門こそりて、念佛は、かひなきひとのためなり、その宗あさしいやといふとも、さらにあらそはすして、われらがごとく、下根の凡夫、一文不通のもの、信すればたすかるよし、うけたまはりて信じさふらへば、さらに上根のひとのためにはいやしうともわれらがために最上の法にてまします、たとひ自餘の教法はすぐれたりと、みづからがために、器量おぼさればつとめがたし、われもひとと生死をなはんともこそ諸佛の御本意にておほしませば、御さまたげあるべからずとて、にくひ氣せずば、たれのひとかありてあだをすべきや、かつは評論のところにば、もろ／＼の

煩悩おこる、智者遠離すべきよしの、證文さふらふにこそ。故聖人のおほせには、この法をば信する衆生もあり、それる衆生もあるべしと、佛ときをかせたまひたることなれば、われはすでに信じたてまつる、またひとありて、それるにて、佛説まことになりけりとしられさふらふ、しかれば往生はいふ／＼一定とおもひたまふべきなり、あやまてそれるひとのさふらはんべらんひこそ、いかに信するひととあれども、それるひとのなきやらんともおほえさふらひねけれ。かくまうせばとて、かならずひとにそれられんとはあらず、佛のかれて信謗ともあるべきむねをしるしめして、ひとのうたがひをあらせじとときをかせたまふことをまうすなりとこそさふらひしか。いまの世には、學問して、ひとのそしりをやめん、ひとへに論議問答をむねとせんとかまへられさふらふにや、學問せばいよいよ如來の御本意をしり、悲願の廣大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかなんといふやまらんひとにも、本願には善惡淨穢なきおもむきをもとき／＼かせられさふらひばこそ、學生の甲斐にてもさふらひめ。たま／＼なに／＼なるもなく、本願に相應して念佛するひとをも、學問してこそなんどい、いひおとさるること、法の寛障なり、佛の怨敵なり、みづから他力の信心かくるのみならず、あやまて他なまよはさんとす、つゝしんでおそるべし、先師の御／＼にそむくことな、かれてあはれむべし、彌陀の本願にあらざることを。

此章は學問をして經釋の行路が分からねばならぬといふ異義に對して、懇々と其不心得を諭したまひて、絶對の信仰は少しも學問の要なきことを示された章である、前章に於て辨ぜし如く、律法主義は學者風に流れるか殊勝風に陥るかの二者何れかである、この章は其學者風の律法主義に對して其誤を正さるゝのである、歎異抄製作の當時たしかに其弊甚だしかりしものと見て第二章の「しかるに念佛よりほかに往生のみちをも存知し、又法門等をもしりたるらん」といふにくくおほしめしておはしますはんべらんはおほきなるあやまりなり、もししからは南都北嶺にもゆゝしき學生たちあほく

あはせられてさふらふなれば、かのひと／＼にあひたてまつりて往生の要よく／＼きかるべきなり」とあるをばじめとして「念佛はまことに淨土にむするたねにてやはんべらん、また地獄へあつる業にてやはんべらん、總じてもて存知せざるなり」との斷言、又結章にも、「經釋のゆくちをもしらず、法文の淺深をこゝろえわけたることもさふらはねば、云云」など當時學者風の律法主義の行はれてあつたことは明らかである、而して其内容は前章の誓名別信計の如き即ち是である、全體學問や道理が益に立つ間は決してたゞ念佛して彌陀に助けられる絶對信仰に入れる筈はない、學問や議論が生きて居る間は御慈悲一つといふ様にならぬのである、御慈悲ばかりと信ぜられたときは一切經を五遍讀まれた法然上人も往生の爲には何の益にも立たぬ、一文不通の愚者でも御慈悲一つで十分である、否學問の有無に拘はらず、御慈悲一つと頂けねば、專終念佛とは申されぬ、全體學問を生かして得意氣にするは何の爲か、名聞利養議論問答の爲である、名聞利養議論問答の爲の念佛や信心なれば、眞に菩提を求むるものではない、たしかに邪雜である疑情である、聖人は信卷菩提心の下に曰く、

横堅菩提心、其言一而、其心雖異、入眞爲正要、眞心爲根本、邪雜爲錯、疑情爲失也、忻求淨利道俗、深了知信不具足之金言、永應離聞不具足之邪心也

とある、而して、信卷下及化卷上に涅槃經を引きて曰く

又復受是六部經已爲論議故、爲勝他故、爲利養故、爲諸有故、持讀誦說、是故名爲聞不具足

と仰せられたが實に此章が正さんと欲する學者念佛は此聞不具足の誤である、眞の聞其名號の信者は如何に他より諍論を持かけても議論を仕かけても却て相手とならず、唯々佛陀を信じ、念佛を喜ぶの外なきことを長々と示されたる章である、本文につきて詳かに味はして頂かねばならぬ。

經釋をよみ學せざるともがら往生不定のよしのこと、この條すこぶる不足言の義といひつべし、他力眞實のむねをあかせるもろ／＼の聖教は本願を信じ、念佛をまうさは佛になる、そのほかなにの學問かは往生の要なるべきや、まことにこのことはまよひはんべらんひとは、いかに／＼學問して本願のむねをしるべきなり、一文不通にして經釋のゆくちもしらざらんひとのとなへやすからんための名號にておはします、ゆゑに易行といふ、學問をむねとするは聖道門なり難行となつて、あやまて學問して名聞利養のおもひに住するひと順次の往生いかあらんずらんといふ證文もさふらふぞかし

抑々眞宗根本の聖典教行信證が其題目に何れも顯淨土眞實教、行、信、證、等とありて彌陀他力の眞實を示さるゝより外はない、故に如何に聖人が一代藏經の中より縱横に引用したまひたるも、畢竟本願を信じ念佛をまうさば佛になるといふより外はない、如來所以興出世、唯說彌陀本願海、五濁惡世群生海、應信如來如實言、抑々一代佛教といふても此外はない、況んや他力眞實を示されたる聖教は本願を信じ念佛申さは佛になるといふより外にあるべき筈はない、全體現今宗學といふ一種の學問がある様に考へられて居るは現に此所に戒め

らるゝ誤を繰り返すものである、言を換へて云はゞ御聖教は信仰の實驗夫自身の外はないのである、皆信仰の結晶に外ならぬ、つまり本願を信じ、念佛を申さば佛になるといふに外ならぬ、而して此一語が亦教行信證を悉くして居る、本願は教である、信するは信である、念佛申すは行である、佛になるは證である、此外更に學問など少しも往生の爲に必要はない、若し學問が存在するものとせば、畢竟この本願を信じ念佛申さば佛になるといふことは明らかにする爲である、抑々彌陀の本願に稱名を選択したまひたる譯は、若し多聞多見を以て往生の業としたらば少聞少智の者往生の望を絶たん、夫故如何なる愚痴無智の者も稱へ易からん爲に念佛の一法を誓ひ與へたまひたのである、ゆへに一文不通にして少しも經釋の行き路を知らぬものが、此の如き愚かなるものを助けんために御成就なされし御本願かと信じたてまつるが干要である、かつて私の從弟が私と同年齡にして殆んど兄弟同様であつたが、學問が不得意でありし上に學齡に軍隊に入り、日清戦争にも従ひ、倭寇の間に日を送りました、凱旋の後如何にして門徒を教導すべきかといふことに非常に煩悶して寺へ歸つて、謹みて、佛前に勤行を爲し、何氣なく御文を拜讀した時「夫八萬の法藏を知ると雖、後世を知らざるひとを愚者とす、たとひ一文不知の尼入道なりといふとも後世を知るを智者とすといへり」とあるに當りて、感涙に咽びて大歡喜を致し、之が爲に立派なる信仰に入りました、其後、日露戦争に於て大安心の上戦死して、却て今は淨土より私を憐みて眺めて下さる事と信じます、これが易行易修の念佛門たる所以でありま

す、學問をむねとして自ら窮めんとするは聖道門難行道のことである、道綽禪師の申されしごとく、我末法時中億々衆生起行修道未有一人得者と、全く聖道門を閉ぢ難行道を開きて、唯有淨土一門可通入路と易行易修の念佛一門だけが信ぜらるゝのである、夫に何ぞや學問を頼みにして居るのは畢竟名聞利養に住するもので、前にも擧げた如く眞に菩提を求むる態度とは申されぬ。

抑々學問をむねとする學者風の律法に陥ると否とは、根本入信の時人生の名聞利養もすてはてし、唯如來の恵み一つに入るや否やに起因するのである、其實例として『口傳鈔』に出である有名な逸話を示さねばならぬ、曰く、あるとき鸞聖人黒谷の聖人の禪房へ御參ありけるに修行者一人御ともの下部に案内していはく、京中に八宗兼學の名譽まします智慧第一の聖人の貴坊やしらせたまへるといふ、この様を御ともの下部御車のうちへまふす、鸞聖人のたまはく、智慧第一の聖人の御房をたづねるはもし源空聖人の御こと歟、しからはわれこそたゞいまかの御坊へ參ずる身にてはなれば、いかん、修行者まふしていはくそのことにはさふらふ、源空聖人の御ことをたつねまふすなりと、鸞聖人のたまはく、さらば先達すへし、この車にのらるべしと、修行者おほきに辭しまふして、そのをそれあり、かなふへからずと云々、鸞聖人のたまはく、求法のためならばあながちに隔心あるべからず、釋門のむつび、なにかくるしかるべき、たゞのらるべしと、再三辭退まふすといへども、御とものものに修行者かくるところのかご負をかく

べしと御下知ありて、御車にひきのせらるゝ、しかうじてかの御坊に御參ありて空聖人の御前にて、鸞聖人鎮西のものとまふして修行者一人、求法のためとて御坊をたづねまふしてはなれば、路次よりあひともなひてまいりてさふらふ、めさるべきをやと云云、空聖人こなたへ招請あるへしとおほせあり、よりて鸞聖人かの修行者を御引導ありて御前へめさるゝ、そのとき空聖人はたとかの修行者をにらみましますに、修行者また聖人をにらみかへしたてまつる、かくてややひさしくたがひに言説なし、しばらくありて空聖人おほせられてたまはく、御房はいづくのひとぞ、またななにの用ありてきたれるぞやと、修行者まふしていはく、われはこれ鎮西のものなり、求法のために華洛にのぼるゝ、よて推參つかまつるものなりと、そのとき聖人求法にはいづれの法をもとむるやと、修行者まふしていはく、念佛の法をもとむと、聖人のたまはく、念佛は唐土の念佛か日本念佛かと、修行者しばらく停滯す、しかれどもきと案じて、唐土の念佛をもとむるなりと云々、聖人のたまはく、さては善導和尚の御弟子にこそあるなれと、そのとき修行者ふところよりつゞき硯をとりだして、二字をかきてささぐ、鎮西の聖光房これなり、この聖光ひじり鎮西にしておもへらく、みやこに世もて智慧第一と稱する聖人おはすなかり、なにごとかははんべるべき、われすみやかに上洛してかの聖人と問答すべし、そのときも智慧すぐれてわれにかさまば、われまさに弟子となるへし、また問答にかたばかれを弟子とすへしと、しかるにこの慢心を空聖人權者と

して御覽せられければ、いまのごとくに御問答ありけるにや、かのひじりわが弟子とすべきこと橋をたてゝもをよがたかりけりと、慢慥たちまちにくだけければ、師資の禮をなして、たちどころに二字をさへげけり、兩三年ののち、あるときかご負かさひて聖光房聖人の御前へまいりて、本國戀慕のころさしあるによりて、鎮西下向つかまつるべし、いとまたまはるべしとまふす、すなはち御前をまかりたちて出門す、聖人のたまはく、あたは修行者が、もとどりをさらてゆくはとよと、その御ことゑはるかにみくにいりけるにや、たちかへりてまふしていはく、聖光は出家得度してとしひさし、しかるにもとどりをさらぬよしおほせをかうふる、もとも不審、このおほせ耳にとするによりてみちをゆくにあたはず、ことの次第をうけたまはりわきまへんがためにかへりまいれりと云々、そのとき聖人のたまはく、法師にはみつのもとどりとあり、いはゆる勝他利養名聞これなり、この三箇年のあひだ源空がのぶるところの法門をしるしあつめて隨身す、本國にくだりて人をかろんじしたがへんとす、これ勝他にあらざるや、それにつけてよき學生といはれんとおもふ、これ名聞をねがふところなり、これによりて檀越をのぞむこと、所詮利養のためなり、このみつのもとりをそりすてずば法師とはいひがたし、よてさまふしつるなりと云々、そのとき聖光房改悔のいろをあらはして、負のそこよりあさむるところの抄物どもをとりいでゝみなやきすてゝ、またいとまをまふしていでぬ、しかれどもその餘殘ありけるにや、つゝにおほせをさしお

きて、口傳にそむきたる諸行往生の自義を骨張し、自障障他すること、祖師の遺訓をわすれ、諸天の冥慮をばからざるにやとおぼゆ、かなしむへしをそるへし、しかればかの聖光房は、最初に慧聖人の御引導によりて、黒谷の門下にのぞめるひとなり、未學これをしるへし。

如何にも見るが如く描かれてある、是全く上に引用したる涅槃經の文にある如く、名聞利養勝他論議の爲にするものなれば即ち聞不具足の人である、信不具足の人である、全体今日青年道を求むる人が理論や研究から進み、修養の爲めに、人格を高める爲に信仰に入らんとするの人が絶對の信仰に入り難きのが是である、名聞や利養の爲と云へばあまり輕蔑した様なれど、御恵み一つを頂かぬまでは眞面目にすることまでが畢竟名利を脱することが出来ぬのである、しかるに若し人生問題より道を求むるときは何事も皆駄目になりて御慈悲一つで救はれるのである、全体聖光坊は非常の學者である、又修道者である、そして如何にも道を求められたに違ひなけれども、道の爲に道を求められたゆへ、如何にしてもかくなり安いのである、之を親鸞聖人に比較するに大に趣が異なる、聖人の道を求められたのは十九歳已後人生に苦しみ惱みて、最後法然上人に遇ひたてまつりて大慈悲を受けられたのである、夫故學問も益に立たず、名聞も利養も生き残る餘裕がなく、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよきひとのおほせをかうふりて信する外に別の仔細なきなりと恵み一つに安心された、なぜなれば、いづれの行もまよひがたき身なれば、地獄は一定すみかぞかしと、學問も何も益にたゝぬ非僧非俗

の一個の愚禿親鸞として自覺されたのである、『末燈鈔』に曰く、故法然聖人は淨土宗の人は愚者になりて往生すと候しことをたしかにうけたまはりしうへに、ものもおぼえぬあさましき人々のまゐりたるを御覽しては往生必定すべしとてあまされたまひしをみまへらせさふらひき、文沙汰してさかしくしきひとのまゐりたるをば往生いかがあらんずらんとたしかにうけたまはりき、いまにいたるまでおもひあはせられ候なり。

證文とは此法然上人の仰せ、之を傳へたまひし聖人の御話をいふなるべし、實に信仰問題は千古萬古同一の軌道を繰返すものである、抑々法然上人が聖道難行を抛て、智恵第一の上人が十惡の法然房愚痴の法然房として専修念佛を弘めたまひたのである、しかるにはや其弟子中にて現に此御言を耳にし、其態度を面り拜しながら、殘念などには眞の御恵みを頂かぬために、修養して上人の態度を擬するまでと惠修念佛の味が分からぬゆへに、念佛を稱へつゝも、出来るかぎり學問して往生の要を窮め、出来るかぎり善を行ずるに如くはないと考へるものゆへ、知らず識らず再び律法主義に陥り諸行往生を許し、又學問する程往生の路を明らかにする様に考ふる様になつたのである、是れ鎮西西山の諸流である、しかるに其専修念佛の骨目を傳へたまひて、信するほかに別の仔細なきなりと告白したまひし聖人の滅後、亦三たび律法主義に陥りて誓願の不思議と名號の不思議を知り分け、さゝわけねばならぬといひ、經釋を讀み學せねばならぬといふ様な異議が起つたのである

る、しかるに猶注意すべきは歟異鈔著作時代ばかりではない、後年宗學なる一部門を形作りて、信仰門と殆んど分かれて成立し得る如く考へらるゝは、是四たび律法主義に陥つたものと言はねばならぬ、眞宗の聖教は生ける信仰の他に何物もない筈である、抑々宗學なるものゝ眞精神も信仰の他にあるべきではない、又初めは信仰の實驗的進條を味ふたのである、しかるに何時の間にか學問化し、律法化し、遂に信仰の生命が蟬脱して一種の學問の如く考へらるる様になつて、名聞利養の道具となるのである、併猶注意すべき事は昔の宗學ばかりではない、現時青年の信仰問題でも左様である、兎角の理窟や學問が信仰の爲にはならぬ、唯御恵み一つを心に頂くばかりである、しかるに眞實恵みをいたゞかず徒らに信仰を言葉で繰り返すときには學問や理窟が難りてくる、極端に言へば眞に御慈悲に氣附いたものでも御慈悲を忘れて、自分が攫んだ氣になつて研究に陥るときは冷かになつて仕舞ひ、御慈悲を解剖したり、御回向の御恵みを名利の道具に用ゐる様になる、眞に懺悔すべきことである、五たびでも六たびでも同一の律法主義が繰返さるゝものである、さりながら眞實御慈悲に氣附かせていたゞけは直に御慈悲に引き戻さるゝのである、聖人が名利の大山に迷惑しと仰せられ、小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなりと仰せられたが此御慈悲の下に懺悔し、立戻る有様を御示し下されたのである、聖教を拜讀し、又傳道に従事するものは此處に氣附かせて貰はねばならぬ。

當時専修念佛の人と聖道門の人と諍論をくはだて、わが

宗こそすぐれたれひとの宗はおとりなりといふほどに、法敵もいてきたり、謗法もあこるなり、これしかしながらみづからわが法を破謗するにあらずや、たとひ諸門ごぞりて念佛はかひなきひとのためなり、その宗あさしいやしといふともさらにあらずして、われらがごとく、下根の凡夫一文不通のものゝ信すればたすかるよううけたまはりて信じさふらへば、さらに上根のひとのためにはいやしくとも、われらがためには最上の法にてまします、たとひ自餘の教法はすぐれたりと、みづからがためには器量あよばざればつとめがたし、われもひとと生死をはなれんことを諸佛の御本意にておはしませば、御さまたげあるべからずとて、にくひ氣せずば、たれのひとかありてあだをなすべきや、かつは諍論のところには、もろくの煩惱おこる、智者遠離すべきよしの證文さふらふにこそ。

既に學問を宗とする聖道難行をすてゝ、ひたすら専修念佛の人となりたる已上は、其御慈悲を喜ぶより外はない筈である、然るに再び學問を取り上げて聖道門の人と諍論を企てる者が當時往々ある所であるが是は矛盾である、眞に入信の人ならばかくあるべきでないのみならず、たとひ他より諍論を企てらるゝとも相手になるべきでない、たとひ罵らるゝことあるとも更に之に抵抗すべきではないと懇々示さるゝ節である、特に如何にも信仰よりあらはるゝ無我無抵抗無碍の心持と態度とを遺憾なく示し下され、心も言も十二分に行き届いてある御教化にて、再三熟讀恍として眞に無碍光中に圓融される心持がある。

全體當時學問をせねば往生不定であるといふ人は専修念佛でありながら聖道門の人と諍論を企て、此方より我慢を張り、我宗こそ勝れたれ人の宗は劣れりなど諍の態度をとるものゆへ、先方も之に對して敵對して法敵も出來、謗法も起るのである、抑々信仰の問題は自分の出離の爲である、其點に満足を得たらば夫て十分である、他の可否を論すべき必要もなければ餘裕もない、しかるに我より他を破謗するゆへに、他亦我を破謗することになる、畢竟是れ自分て自宗を破謗する道理である、四十二經に曰く

佛言有^レ人、聞^レ吾守^レ道行^レ大仁慈、故^レ致^レ罵^レ佛、佛默不^レ對、罵止、問曰子以^レ禮從^レ人、其人^レ不^レ納禮歸^レ子乎、對曰矣、佛言、今子罵^レ我我今^レ不^レ納、子自持^レ禍歸^レ子身^レ矣、猶^レ響應^レ聲影之隨^レ形、終無^レ免^レ離^レ之^レ爲^レ惡。

佛言惡人害^レ賢、猶^レ仰^レ天而唾唾^レ不至^レ天還從^レ己墮、逆風揚^レ塵、塵不^レ至^レ彼還從^レ己身^レ賢、不可毀、禍必滅己。

大學に言悖て入るものは亦悖て出つ、財悖て入るものは亦悖て出つとある如く、我より罵り我より唾すれば亦我罵られ唾せらるゝのである、我より諍へは他の諍ひ來るは當然である、誓に我より諍はざるのみならず他より諍ひ來り、誹謗するとも苟も念佛せん人は決して之と争ふべきことではない、たとひ諸門舉て念佛は甲斐なき人のためである、其宗淺し賤しいと言ふとも、決して諍ふべきでない、而かもかく答ふべきである、いかにも我等の如き下根の凡夫、一文不通のもの、信じ稱ふる爲に成就されし本願念佛なりと承りて、仰せ通り信じたる已上は成程上根の人には卑しくとも我等に向ては最上の法

である、何んとなれば自餘の教法は如何に勝れたりとも我等がためには免ても行すること出來ぬゆへに致方なし、かくの如く自餘の行の行へぬ者の爲に起したまへる本願なれば、幸に此本願の御力によりて生死を解脱することが出来るのである、抑々三世諸佛の本意我等が生死を解脱するにある已上は聖道、淨土、道は異なりと雖有縁の法によりて解脱を得るなれば御心配下さるなど、悪くげなる態度をとらなかつたならば誰人か其上に敵對したり、障礙したり、破謗することかあるべき、此語氣はたしかに善導大師の散善義に解行不同の邪雜の人等來りて惑亂する時の答と全く同様である。曰く、

何況佛法不思議之力、豈無^レ種^レ益^レ也、隨出^レ一門^レ者即出^レ一煩惱門^レ也、隨入^レ一門^レ者即入^レ一解脫智慧門^レ也、爲^レ此隨緣起^レ行^レ各求^レ解脫、汝何以乃將^レ非^レ有縁之要行^レ障^レ惑於我、然我之所愛即是我有縁之行、即非^レ汝所求^レ、汝之所愛即是我有縁之行、亦非^レ我所求、是故各隨^レ所樂^レ而修^レ其行^レ者必疾得^レ解脫^レ也。

生死解脱の問題は議論すべきことでない、各實驗するのみである、夫故たとひ他が此の如く諍ひ來るとも無抵抗無我の態度がとらるゝのである、猶注意すべきことは歎異鈔の筆はあまりに自由自在に痒き所に手の届くもの故何れの章でも信念よりも人情を先にして傾解する弊がある、第二章にせよ第九章にせよ、先づ何人も親鸞聖人の法然上人に對する態度、又唯圓房に對する同情といふ點に着眼して、信念其物を味ふことを第二にする様になる、第二章に法然上人にすかされまわらせて地獄に落ちたりともさらに後悔すべからず候とあるは、

たゞ念佛して彌陀にたすけれられまゐらすべしとの本願其物を信じたからである、第九章に喜ふべきことを喜ばぬにて往生はいよゝ一定とおもひたまふべきなりといふは、決して唯圓の機に隨ひてかく宣ふにあらず、實際選擇本願は我等如き煩惱に苦しめられて喜ぶべきことを喜ばぬものゝ爲に立てたまひたるなれば、實際喜ばれぬ我一人が爲と一入身に泌みていたゞくのである、其如く此章の如きも如何にも柔順なる態度で、心にくさ迄何んとやらん殊更に卑下した様にまで思へることがある、かく考へると是が皆修養上より作りたこととなる故に、何んとなくわざとらしく考へられて、抵抗に對して一種無抵抗といふ抵抗の態度をとりたこととなる、しかるに實際は第二章の何れの行も及びがたき身なれば地獄は必定すみかすかしと同じく、自餘の教法は實際およびがたければ我爲に此法こそ最上の法であるといふ其信念の儘があらはれて、自然に此の如き無我の態度を現じたのである、古來傳へる如く聖人が法然上人の御代理として、座主の前に出て種々の諍論を仕掛けられながら、相手にならず沈黙落涙して歸られた、即興御書に「向後も座主などの入せたまふ處逃歸せたまふべく候」とある如き、事實如何は別に研究せねばならぬが聖人の態度として如何にもあり得べきこと、信ずる、ぞして其御心持は此章が恰も之を告白してあることになる、法然上人七個條の起請文の第二條に曰く、

一無智の身をもて、有智のひとに對し、別行のともからにあひて、このみて諍論をいたすことを停止すべき事、右論議はこれ智者の有なり、さらに愚人の分にあらず、

また諍論のところにはもろゝの煩惱ある、智者これを遠離すること百由旬なり、いはんや一向念佛の行人にあひてをや

是れ證文として引用せるものなるべし、而して其文句は大寶積經に戲論諍論處、多起^レ諸煩惱、智者應遠離^レ當去^レ百由旬とあるより出たのである、かく聖人及び弟子がとられたる態度は、即ち前に舉げたる證文と同じく、皆法然上人の御教化より流れ出て、無碍圓融、自ら知らず識らず帝の則に順はれたる次第である。

涅槃經に依るに、佛の言はく、若し人但能く至心に常に念佛三昧を修する者は、十方諸佛前に此人を見えなばし給ふこと、現に前に在るが如し、是の故に涅槃經に云く、佛、迦葉菩薩に告げ給はく、若し善男子善女人有て、常に能く心を至し、専ら念佛する者、若し山林にもあれ、若し聚落にも在れ、若しは晝、若しは夜、若しは坐、若しは臥、諸佛世尊常に此の人を見えなばすこと、目前に現るが如し、恒に此の人のために受施を作さむと。大智度論に依るに三番の解釋あり。第一には佛は是れ無上法王なり、菩薩は法王と爲す。尊くする所重んずる所唯佛世尊なり、是の故に應當に念佛すべき也。第二に諸の菩薩有て自ら云く、我れ願わくは已來、世尊我等を長養することを得たりき、法身智身大慈悲身、禪定智慧先覺の行願佛に由て成るを得たりき、報恩の爲めの故に、常に佛に近きたまつらんと願ふ、亦大臣の王の恩寵を蒙りて、常に其王を念ふが如し。第三に諸の菩薩有て、復是の言を作さく、我因地に於て惡知識に遇ひて波若を誹謗して惡道に墮しき、無量劫を運て餘行を修すると雖、未だ出づること能はず。後に一時に於て、善知識の邊に依りしに、我を教へて念佛三昧を行せしむ、其の時に即ち能く併ながら諸の障りをしめて方に解脫を得しむ、斯の大益有るが故に、佛を離れずと願ふ。〔親鸞聖人信卷〕

嘆 咏

うれしき舟路

八

風

霧霽れて、
 み空くまなく、
 風あれむ
 憂も絶へつ。
 そよ吹く風に
 水夫がちをとる。
 疾しやとしや
 立つ波は左右に分れ、
 遠方は近づき来る。
 早や見え初めぬ
 行くての島山。

た か ら

さまよひめぐり
 やまじとするや。
 みよやたからは
 ちかくにあるを、

時 報

尾 参 傳 道

三月歸省して江州及美濃に傳道せしこと前號報する所の如し、引續き尾参有縁の間を傳道せし概況を叙せんかな、
 三月二十日美濃太田村出立、南の方桑名に向ふ、時間少くして入車馳すること韋駄天の如し、かねて遠く東京まで、求道し來りし伊藤喜市君其友を伴ひて停車場に待ち受けらる、乃ち先づ其友の爲に道を説き、伊藤君同道尾張蟹江に下車す親友梶井研九君待受けらる、君は中學時代已來の親友にして殊に予か入信前煩悶せるとき君か家を訪ひたることありき、是特に君か郷里を訪ふ毎に感謝と回想とに満たさるゝ所以なり、某の水、某の堤皆當時苦しみつゝ跟々として行きし所、遂に大野村廣覺寺に着す、即是君か寺也、母公令兄夫人愛嬢同朋同行皆待受けらる、恍として醒へるが如し、午後法話すること二席、回顧せは今より六年前正に予か父入寂の後君が寺を訪ひて法話せしことありき、而して今年は不思議にも當時結びし法縁を新にし、感謝するの機熟せるか如し、江州郷里及此地皆是なり、皆是佛天の御引き合せと感謝し奉る、伊勢より渡邊知空君來り訪はる、講話後伊藤君と信仰を語り君大満足を以て辭し去らる、其夜信仰談話會を開く、此會は數年前より梶井兄及令兄、千葉氏等六人の同朋を以て組織されたるも

たゞそのたから
 つかむをまなべ、
 たからはつねに
 うせずしあれば。

天 に

甲

乙

眼前土忽ち裂け
 向ひの岸は千里萬里、
 近くつばらに見たりしことく
 天なる星のかすかなる
 列なす形小さけど
 いよくまされ鋭き光

適 應

靡く竹むら
 夏の空を
 おほひて暗し、
 どよむ空合
 夕立來なむ、
 われが心に
 適へる路かな。

のにして和氣箴々として慈光室に滿つ、滿身の法悦に充たされ床に就く、味爽早く起き前號社説を草す、廿二日午前法話二席「山は山、道は昔にかはらねどかはりはてたる我心かな」の歌を説くに至りて、十三年前の事を回想して今昔の感に堪へざりき、無限の法恩に浴しつゝ、御同朋御同行に別を告げ梶井兄に送られて渡邊君、と共に蟹江驛より乗車、この紀念すべき地と親友とを辭す、
 二十二日午後伊勢一身田に向ふ、是れ聖人の芳躰につきて慕ひたてまつると又親友眞岡湛海兄に遇はんが爲なりき、是亦七年前尋ね來りたりき、而して今や同一の境遇にあり、稻垣三壽氏を訪ひ款待を享く、氏は眞岡兄の令兄也、既にして眞岡兄來らる、相遇はざるごと久闊、懷舊の情、苦念の披瀝、數年の星霜跡夢に似たり、夜青年會の爲に二席の講話を爲す、翌二十日日本山專修寺に参詣し、新法主臺下謁見の榮を賜ふ、又多年聖人の芳躰につきて慕ひたてまつる事蹟につき新光明を見出すことを得たり、是全く同山法主臺下及び當局の人々が特殊の恩遇を賜ひし光榮を得たれば也、而も當日恰も聖德太子の御命日に相當せり、和讃に曰く多生曠劫この世まで、あはれみかみれる此身なり、一心歸命たへずして、奉讃ひまなくこのむべし、山海の鴻恩謝するに言なし、廿三日味爽朝霧漸く晴れ、旭曠東に上るの頃眞岡兄に送られて出立す、南無阿彌陀佛、午前名古屋に着し、一時間半の閑を得て、支那忠の一室に於て前號自督欄を認む、午後三河刈谷に下車す、神谷周助氏に着す二日間の安所なり、安藤現慶君來着せらる、君は無我愛同朋の魁たりき、活動度に過ぎたるため、歸國靜養せられし

が、其後全快近時身神頗る勇健相見て慶喜極まりなし、君は已後五日間參州に於ける東道の主人也、午後熊村安養寺に於て決心會にて講話、安藤君求道の動機につきて述べ予は信仰の實驗を述べ、同夜小山村妙專寺に於て赤心會の講話安藤君教育と信仰につきて辯じ予は人生問題及十七憲法につきて辯ず、當時非常の降雨たりしにも拘はらず、教育家、吏員青年來聴する者多し、夜半神谷氏方に歸りて就寢、

二十四日午後刈谷町青年會にて講話し、同夜神谷氏宅に於て信仰談話會を開く、熱心なる求道者凡そ二十名來集、石原君切實に求め、實驗の光を認む、加藤君村田師の感化を受け、居常念佛す、其他青年諸君求道の念熾也、碧海郡役所書記某君尋來らる此に刈谷求道會の成立を見る、

二十五日刈谷にて朝の法話を終へて東南一里半高濱恩任寺に開會、已後三日間大谷派第七組北部に於て經營せられつゝある教學會大會開催の爲也、牧、本田等の諸氏來會せらる、安藤君成中詔書を捧談して講話す、予亦二席講話、信仰の實驗を語る、已後毎日亦同し此日濱風烈し、

二十六日昧爽起て十七憲法原稿を認む、曉に至りて濱の間に居を移す、眼下海波到る、海を隔て數町、岩崎町あり、遙かに龜崎あり眺望絶佳、乃ち原稿を認め、且信仰談を爲す、朝の法話を終りて南の方二里、新川町を通過して、大濱西方寺に立寄り、清澤先生の墓に詣づ、先生没後既に七年、葬送の日昨の如き感あり、墓木拱ならんとするの感あり、先生の實父養母令息等に見ゆ、是より先き法賢師來簡ありて講話を望まれしが出違となり、而して生憎不在師に遇はざりしは遺憾

なりき、東行二里、矢作河畔を添ふて米津村龍讀寺に着す、聴衆眞摯殊に青年多し、何れも求道の念熾也、西尾の人都築百太郎君來訪、入信の告白を齎さる、即ち本號掲載するもの是也、此日安藤俊慶、同宣成加藤有門氏等來會せらる、又坊守教誠に於て眞宗家庭の精神を話す、

二十七日、朝一席の講話を爲す、西南二里車上坂前を眺めつゝ行く、此村は京極君の村也、嘗て君が寺を尋ねしも回顧すれば既に數年を経たり、君今病床にありとさく、冀くは慈光君か上にあらんことを、安城町福釜西岸寺に到る、參詣者堂に滿つ、住職松林丁觀實踐躬行を以て青年及び信者を帥む、青年一同勤行を爲し、其態度眞摯也、講話二席青年の爲に一席、其後坊守教誠一席を爲す、安藤現慶君の母公及夫人安藤俊慶京極德隣氏等來會す、今回の行安藤君と同道して造次顛沛にも信仰を語る、特に此日君感泣して慈悲を感謝せらる、乃ち安藤君に送られ午後七時安城驛乘車歸京の途につき翌二十九日の日曜講話前に歸舍し、先づ佛前に禮拜し奉る、最後に臨み今回の歸國傳道につき厚意を辱ふせし、近江、美濃、尾張伊勢、三河の有志諸彦の温情を感謝し奉る、南無阿彌陀佛。



懺悔錄

附錄「歎異鈔」

第五版

定價 廿錢
郵稅 四錢
袖珍 美本

本書は著者が實驗の信味に基づき、古來求道者の金科玉條たる「歎異鈔」の眞髓、惡人救済の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歳以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と、最後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黑闇頓に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中大安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救済の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し之れ「懺悔錄」の名ある所以にして發行以來來書を縁として入信の士に乏しからざるは吾人の私に感謝措く能はざる所。而して今回其第五版を發行するに及び、紙質製本等更に充分の改良を施せり。求道者諸君の必讀を冀ふ。

親鸞聖人の信仰

初版

定價 七十錢
小包料 八錢
クロース綴

親鸞聖人の「教行信證」が聖人一代の信仰經驗の結晶にして、他力信仰界唯一の寶典たる事は既に諸君の知了せらるゝ所、著者入信以來此の寶典を以て自己が信仰の生命となし、日夕拜誦熟讀せる事既に多年、或は之を各地の講習會に講じ、或は求道學舍來訪の諸君と語り殆んど日として其の化を蒙らざる事無し。而して其實驗感佩の餘録を編述して茲に初めて世に公にしたる者を本書となす。固より聖人の偉大なる信仰は本書の能く盡す所にあらずと雖も、又以て讀者が聖人の信仰に接し給ふの一階梯たるに足らんか。是れ實に著書が至願とせる處なり。聖人の信仰に隨喜せらるゝ諸君の必讀を請ふ。

所行發道求 地番一町川森區郷本京東 所込申

今井昇道師著 ● 南無の釋 全一冊 定價二角十錢 求道讀者郵稅不要

●●●●● 佛敎に關する智識の無盡藏也 ●●●●●
文學博士村上專精先生監修 法藏館編輯局編輯

輕便新裝

佛敎百科寶典

第三版豫約出版
製 堅四寸四分 巾三寸三分
全文五號活字振假名付
總布クロス背表金文字入
本 堅牢洋綴美裝一千頁内外

● 定價金壹圓貳拾錢 郵稅八錢
● 豫約價金六拾錢 郵稅八錢
● 豫約期限 明治四十二年五月中旬

本書の内容
● 教義 佛敎各宗の教理を安んずる
● 傳記 佛敎の祖師の生平を記す
● 詩歌 佛敎の教義を讃嘆する詩歌
● 統計 佛敎の宗徒の數を統計する

● 法相 佛敎の教義を法相の點から説明する
● 故實 佛敎の歴史を故實の點から説明する
● 金言 佛敎の教義を金言の點から説明する

● 歷史 佛敎の歴史を歴史の點から説明する
● 譬喩 佛敎の教義を譬喩の點から説明する
● 古蹟 佛敎の古蹟を古蹟の點から説明する

初介丁昌師著 ● 四十八願法話 三十五錢 和田龍造師著 ● 明惠上人語錄 四十五錢
小笠原 篤實師著 ● 大經聖訓講話 三十錢 法藏館編輯 ● 信仰七部聖典 三十五錢
發行所 京都市東六條 電話二二五八番 口座二五四一番

今井昇道師著 ● 他力安心示談 全六冊 定價一圓八十錢 求道讀者郵稅不要

安藤一州師著 ● 安慰錄 定價二角十錢 郵稅不要

曉 烏 敏 編 (最新刊)

惠空語錄

金八拾錢 小包料八錢

佐々木月樵撰 (第二版)

秀存語錄

金六拾錢 郵稅六錢

柏 原 禿 編 (新刊)

香樹院語錄

金七拾錢 小包料八錢

多 田 鼎 著 (第二版)

恩寵の宗教

金廿 郵稅四錢

藤 州 一 著 (最新刊)

生活問題

金八錢 郵稅四錢

次 目

- 一 人生と生活問題
- 二 釋尊と生活問題
- 三 孔子と生活問題
- 四 ソクラテスと生活問題
- 五 他力信仰と生活問題

東京巢鴨二ノ五 無我山房 振替東京一三二

訂正
增補

信仰之餘瀝

第十版
定價 卅錢
郵稅 四錢
袖珍 美本

本書は著者が拾餘年前端なくも苦悶の暗黒界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歳の迷雲一時に消散したる時、自ら其心的經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表したるもの、文字に些の修飾を加へず、ひたすら内心實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸にも發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、發賣部數既に一萬餘部に達し、本書を縁として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所、今や其の第拾版を出すに及び、更に根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に増補する處六篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附録として『予か信仰的實驗』なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根柢は本書に於て最も明かならん。

冠頭 歎異鈔

第三版
部數ニ應シ充分割
定價 五錢
郵稅 四冊迄貳錢
施本用小冊子

此の『歎異鈔』は聖人の遺教を世に普からしめんが爲め、施本用小冊子として出版せるものにて、讀み易きやう字をまばらに植ゑ、校正を嚴密になし、且つ冠頭を加へて諸聖教中より參照すべき之を引用し、親切に作りたるものなり。敎家諸君の御一顧を俟つ。

信仰之餘瀝要畧

初版
部數ニ應シ充分割
定價 五錢
郵稅 四冊迄貳錢
施本用小冊子

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に『信仰之餘瀝』中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を援奉し、傳道用小冊子として印刷したるものなり。有志諸君の御試用を切望す。

近角常觀著

人生と信仰

定價 卅錢 郵稅 四錢

- 第一章 人生問題と信仰
- 第二章 悲觀思想と信仰
- 第三章 倫理力行と信仰
- 第四章 犯罪心理と信仰
- 第五章 社會問題と信仰
- 第六章 國家秩序と信仰
- 第七章 世界宇宙と信仰

本書は一昨年雜誌『求道』秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸氏の需要益々急切なる爲め、再び一冊として茲に發刊したるものなり。蓋し現代思想界の亂調は律法的敎訓、若くは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書を發行する所以也。

發行所 森江書店
發賣所 求道發行所

東京市本郷區春木町二丁目
振替口座東京八二一九番
東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

規定

- 一 本誌は毎月一回一日發行とす
- 一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ
- 一 郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
- 一 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一 凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
- 一 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の住所を通知する事
- 一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一 本誌定價左の如し

一部 一ヶ月 六ヶ月 一年
金拾錢 金拾錢 金六拾錢 金壹圓拾錢 郵稅一冊
●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

明治四十二年三月二十七日印刷
明治四十二年四月一日發行

發行所 求道發行所
發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
(振替口座東京一六六九六番)
大賣捌所 東京市神田區表神保町 東京堂

發行所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

